

# 壺棺再葬墓の基礎的研究

設 楽 博 己

はじめに

1 概念規定と用語の整理

2 時期区分と分布の変動

3 再葬のプロセス

4 再葬の原理

おわりに

## 論文要旨

民族・民俗学で複葬と呼ぶ葬法は遺体を何度も故意に取り扱うため、葬儀が複数回におよぶもので、考古学ではこれを一般的に再葬と呼んでいる。日本列島では縄文晩期終末から弥生Ⅲ期までの東日本の一部で、主に壺形土器を蔵骨器にした再葬墓が発達した。この再葬墓に特徴的なものは、一つの土坑の中に複数の土器を納めた複棺再葬墓であるが、複数の土器棺に納めた人骨が複数体の場合は、一括埋納の契機や合葬された人々の社会的関係が問題になってくる。

複棺再葬墓の土器には摩滅状態の著しいものや補修痕のあるものが日常集落以上に含まれる。また、一土坑の複数の土器には型式差のあるものが共存し、埋納までに要した長い集積の期間を推測させるものもあるが、それはまれである。一土坑の遺体数は2～4体で7体という例もみられる。これら合葬人骨は男女ともにもあり、また成人と小児など世代を超えたものが組み合わせる場合もある。

したがって一土坑における複数の納骨土器は、ある期間の集積を経て一括埋納されたものであり、集積の期間はまれに長期にわたる場合もあるが、多くは土器型式の存続期間を超えるほど長くなかったとみられる。ならば、この一土坑に合葬された者の紐帯は累世的なものとは考えにくく、血縁の紐帯が世帯のまとまりか世代によるまとまりかということになる。出土人骨におもきを置けば年齢階梯的つながりは想定しがたく、血縁か世帯であろうが、これを解くてがかりは墓域の構成にある。

初期の再葬墓群は弧状を呈するものがある。福島県根古屋遺跡の分析からすると、弧状の墓域がいくつかの群に分かれており、各群に新古の墓坑がみられる。これはあらかじめ墓域を区画して埋葬していったものであり、これら各群は縄文時代の埋葬小群と同様なものだと見える。縄文時代の埋葬小群は血縁のつながりがある身内のグループと、非血縁の婚入者のグループからなる一つの世帯の累積的墓群とされる。縄文時代後・晩期には夫婦など血縁関係にないものどうしの合葬はおこなわなかったとされる。複棺再葬を合葬の一形態とみなし、そこに縄文時代の合葬原理が生きているとすれば、こうした縄文時代の墓域構成を踏襲した初期の複棺再葬墓は、なんらかの血縁的な関係にある者どうしを合葬した土坑と考えるのが妥当だろう。そしてそれらが集合した埋葬小群が、一つの世帯の歴史的な墓群であり、墓域全体が一つの集落の墓地だと考える。

## はじめに

近年の日本考古学でもっとも研究の進んだ分野のひとつが、農耕社会の成立、すなわち弥生時代の開始をめぐる諸問題である。これは、北部九州において、従来縄文時代と考えられていた時期における水稲農耕の確認〔山崎ほか 1979, 中島ほか 1982〕に端を発し、近畿地方における縄文晩期終末の、突帯文土器の時期にまでその問題は波及し、縄文／弥生の時代区分論争を生んだ〔藤尾 1988, 武末 1991など〕。この研究の波は東日本をも巻き込み、従来縄文時代と考えられていた弥生前期並行期に、東北地方でも水田稲作を始めていたことが明らかにされるに至った〔村越ほか 1991〕。だが、東日本におけるこの課題に対する研究の多くは、文化伝播の観点からの問題提起にとどまっている。在来の縄文文化にみられる個々の文化要素の変容の有無、その変容のしかたを新来の文化要素と比較研究し、その総体のうえに立った東日本弥生文化生成論という、「文化変容の視点からの研究」〔山内 1932, 佐原 1975, 加納 1987〕はまだ希薄である。

弥生時代初期の中部地方から南東北地方における集落や生産遺跡のデータは少なく、初期農耕文化の追究に多くの支障をきたしている。その反面、この地域では遺体を遺骨にしてから再び埋葬する再葬が盛んにおこなわれたことが確かめられており、再葬墓はデータの蓄積と研究が進んでいる〔杉原ほか 1974, 星田 1976, 宮崎ほか 1985, 飯島ほか 1986・87, 石川 1987・89a, 北武蔵古代文化研究会編 1988, 荒巻ほか 1988, 外山ほか 1989など〕。

これらの再葬墓は土器に納骨して埋葬する土器棺再葬墓であり、とくに壺棺が圧倒的多数を占めることから壺棺再葬墓と呼ばれている。もっとも特徴的なのが、一つの土坑に複数の土器を埋納したものであり、こうした土坑が複数集まって一つの墓地を形成している。ならば、この土坑には何人分の遺骨を納めたのか、それが複数体であるとすればそれらの人々のつながりはいかなるものであったのか、さらにそれらが集合する墓地の構造はどのようなものであったのか、ということが問題になる。壺棺再葬墓の研究は、その起源と展開、終焉の問題、葬送過程の復元や墓域構成から社会組織の実態を究明することなど、先に提起した問題に葬墓制の面から接近するにはさまざまな問題が山積している。このうちの起源の問題に関しては、すでに触れる機会があり〔設楽 1991・93〕、また研究史とともに別稿を準備中であるので、今回はとくに複数土器を埋納した土坑の形成過程と墓域構成の問題に焦点を当てて、縄文時代の葬墓制と比較しつつ、再葬の原理について考えてみたい。

再葬の問題は、民族・民俗学のテーマとも触れ合い、比較研究のうえではなはだ興味ぶかいのであるが、反面日本考古学のこの問題に対する取り組みにおいては、民族・民俗学からの概念や用語の借用が多く認められ、そのために混乱を生じている。したがって、まずはそうした概念や用語の整理をおこなう必要がある。

## 1 概念規定と用語の整理

遺体を何度も故意に取り扱い、葬儀が複数回におよぶ葬制を民族・民俗学では一般的に複葬制と呼称する。複葬制に類する葬法の考古学的事例はいくつもあげることができるが、研究者によって用語に統一性がない。洗骨葬、二次葬、二重葬、多次葬、改葬、再葬、複葬など、さまざまである。

「洗骨葬」はいったん遺体を埋葬して骨化を待ち、再びそれを取り出し、酒などで洗い清めて甕に入れ、再埋葬する葬法である。考古学的には洗っているか否かは証明が無理である。「二次葬」、「二重葬」は、民族例に葬儀が3回、4回にわたるものもあるから適当ではない[大林 1965]し、再埋葬にいたる一過程を示す用語でもある。「多次葬」は何度も葬儀を経ていることが示されているが、考古学的に定着しているものではない。民俗学では、南西諸島の洗骨葬を「改葬」と呼ぶのが一般的であるが、考古学で改葬といった場合には、古墳時代の横穴式石室の石棺にしばしばみられる、追葬の際のかたづけなどに用いられる。これは、遺体を骨にしてさらに葬儀をおこなうという意識のもとになされたものではない[都出 1986]。

「再葬」は考古学で一般的に用いられる概念である。本来の語義からすれば死の確認や一次葬などの手続きは含まない。すなわち一次葬を経て再埋葬される過程のうちの一こまを示す用語にすぎないはずだが、考古学ではそうした過程すべてを包括して再葬と呼ぶ場合が多い。「複葬」は民族・民俗学の用語であり、一次葬やさまざまな葬礼など考古学では証明しにくい事象を含み込んだ概念で用いられる。考古学では最終的な再埋葬の場だけではなく、再埋葬にいたる一連の過程を復元的に研究することが課題である。そうしたときに、再埋葬にいたる一連の過程と制度をくくるものとしては「複葬制」の用語がふさわしいのかもしれない。しかし、実地調査など考古学的には不可能な方法によってその背景が明確にされている場合の多い民族・民俗学の成果と歴史性を異にする考古学の事象との安易な野合はつつしむべき[石川 1987]だろうから、複葬制に類する考古学的な現象は再葬の名で呼びわけておくのが適切である。

複数回にわたる葬儀を経た埋葬である複葬、再葬に対して、葬儀が一回で終了するものを「単葬」という[大林 1965]。民族・民俗学のデータから再葬のシステムは一般的に、死の確認→一次葬→二次葬（再埋葬）という三段階に単純化できる。「一次葬」（初葬）を、遺体処理とそれに伴う儀礼の過程、「二次葬」を遺骨処理とそれに伴う儀礼の過程と定義する。再葬の用語はこの過程全体を指して呼ぶ場合もあれば、一次葬以降の再埋葬に使う場合もある。

理論的には、考古学上の再葬システムにもこの三段階の遺跡・遺構があり、まれに一次葬やその際の骨の処理の跡とおぼしき遺構も認められる。しかし、考古学でいう「再葬墓」は再葬の最終段階の遺構として認識されるのが一般的であり、考古学ではこの墓地を「再葬墓遺跡」と呼ぶ。その場合、墓地全体における個々の再葬墓の占める比率が問題になろう。愛知県伊川津遺跡では

再葬墓がたくさん見ついている〔春成ほか 1988〕が、この墓地全体をさして再葬墓遺跡とは呼ばない。日本考古学で再葬といった場合、狭義には初期弥生時代の東日本の一部で盛行する葬墓制を指すことが一般的であるが、それ以外の再葬をぼかしてしまう恐れがないとはいえないので、分類と定義を必要とする。

再葬は、骨の埋納施設からみると基本的に骨を集めて土坑に埋葬するものと、土器に納めて埋葬するものに分類できる。前者を「集骨葬」、後者を「土器棺再葬」と呼称する。集骨葬は明らかに再葬と考えられるものもあるが、単葬にまじって少数存在しているものには、改葬との区別がはなはだ困難な場合もある。また、土器棺再葬も単葬にまじって1～2基しかみられない場合は、偶然掘り出された人骨を土器に納めた場合もあるだろうから、改葬との間に一線を画すことはむずかしい。こうした例は、墓地における状況や集骨の内容にまで立ち入って検討を加える必要がある。それらを保留すると日本の原始時代には、再葬が普遍的葬法として、すなわち制度として定着したのは稀なことであった。

集骨葬はしばしば集積葬の名で呼ばれ、この特殊なものに「盤状集積」と呼ばれるものがある。三河地方の縄文晩期に特有の葬法であり、長管骨を井桁に組んで、その中に割った頭蓋骨やその他の骨を詰めたものが一般的である。これは「人骨の盤状集積」〔清野 1925〕から生まれた用語であるが、たんに集積葬といった場合、何を集積しているのか不明である。そこでこれを集骨葬の一形態とみて「盤状集骨葬」と呼称する。また、集骨葬の場合、複数の人間だけでなく1体の骨を集めて再葬したものも含めておく。しばしば十数体にも及ぶ人骨を一つの墓坑に集積した例があるが、これを多人数集骨葬としておく〔設楽 1993〕。

土器棺再葬墓のうち、東日本の初期弥生時代に発達したものは、壺棺再葬墓〔石川 1981〕の名で呼ばれる。壺棺再葬墓には一つの土坑に一つの土器棺を納めたものと、複数の土器棺を納めたものがある。前者を単棺型壺棺再葬墓、略して単棺再葬墓、後者を複棺型壺棺再葬墓、略して複棺再葬墓と呼んでおく。複棺型の場合は壺の中からしばしば成人骨が検出されることと、その特徴的な形態から再葬墓であると類推できるが、単棺型の場合は土器内から成人骨が見つからない限り、乳児などの単葬との区別は非常に困難である。土坑など単葬との共存関係や、他の遺構との関連性のなかで判断せざるをえない。斎藤忠は、このほか岩陰にみられる再葬墓を岩陰再葬墓と称している〔斎藤 1977〕が、こうした例もたんに再葬の最終段階のバリエーションとみるよりも、再葬の一連のプロセスのなかに正しく位置づけるべきであろう。

縄文・弥生時代の中部高地を中心として焼けた人骨がしばしばみられる〔石川 1988〕。縄文時代のもは配石遺構に伴うことが多く、石棺状遺構に納めたり配石に散布したりする。弥生時代は岩陰などから出土する。これらも骨にしてから焼くのか、現代の火葬と同じく死んだのちにただちに焼いて遺骨を埋納するのか、その判断は容易ではなくそれぞれ意味が異なる場合もあるだろう。だが、後者の場合でも骨化することに意味があると思われるから、再葬の仲間に加えることも可能であり、焼けた人骨を再葬の一形態として通例に従い焼人骨、焼人骨葬と呼称する。

## 2 時期区分と分布の変動

これ以降の議論に必要な、壺棺再葬墓の時期区分の大枠を示しておく(図1)。すでに石川日出志は、壺棺再葬墓の5期区分を呈示し[石川 1987]、若狭徹は再葬墓出土土器を中心とした関東地方の初期弥生土器編年をおこなっている[若狭 1992 a]。本稿の時期区分はおおむねこうした区分と一致するが、再葬墓の変遷の画期を尊重しつつも弥生土器編年に一般化しているⅠ～ⅤないしⅥ期区分を考慮し、壺棺再葬墓がおこなわれた弥生Ⅰ～Ⅲ期との対応をはかった。

0期:大洞A式,馬見塚式並行期以前。愛知県では馬見塚式期に大形壺が出現し、壺棺再葬墓もこの時期にさかのぼる可能性はあるが、大形壺の中から成人骨は検出されていない。福島県では大洞C<sub>2</sub>式の古い段階で、すでに大形壺を埋設した土坑が検出されている[大竹 1992]。これが成人骨を納めたものだとすれば、壺棺再葬墓もさらにさかのぼることになるが、まだ人骨の検出例はなく不確実である。

1 a期:縄文晩期終末の大洞A'式の古い段階,弥生Ⅰ期の檜王式に並行する時期。福島県では、岩尾遺跡[中村ほか 1982]、墓料遺跡[須藤ほか 1984]、根古屋遺跡[梅宮ほか 1986]など会津から中通り地方にかけて、複棺再葬墓がこの時期に突如として完成した形で出現する。根古屋遺跡の土器群はおよそ3期に区分できる[志賀 1986, 設楽 1991]。そのうちのもっとも古い時期の土器棺は83個体のうち58個体が壺形土器で、壺棺再葬墓の確立が大形壺の成立と密接な関わりをもっていった[中村 1988] ことがわかる。

それらの大形壺は在来の甕形土器や浮線文土器と呼ばれる中部地方の甕形土器を変形させて仕上げたものもあるが、福島県より北に分布する大洞A'式の壺形土器を大形にしたものを取りわけ多く採用している。愛知県では檜王式に大形壺が普及する。この時期の壺形土器から成人骨はまだ検出されていないが、壺棺の発達と次の水神平式の壺棺再葬墓との類似から再葬墓の可能性が指摘されている[石川 1981]。これが正しいとすれば、この時期の壺棺再葬墓はまだ関東や中部高地では検出されていないので、互いに離れた地域で複棺,単棺という異なった形態をとりつつ核的な分布を示すことになる。再葬が広がる内陸の浮線文土器分布域と、大形壺をもつ地域が接触するところで壺棺再葬墓は成立したためとみたい。

1 b期(古)段階:弥生Ⅰ期の大洞A'式の新しい段階もしくは砂沢式と、檜王式の新しい段階から水神平式の古い段階に並行する時期。各地に大洞系の壺形土器と条痕文系の壺形土器が直接,間接に影響を及ぼし、それらが融合して独自の壺形土器が形成され再葬墓に土器棺として用いられる。山形県生石2遺跡[小野 1987]、茨城県女方遺跡[田中 1944]、群馬県南大塚遺跡[大塚 1986]、神奈川県及川遺跡,長野県針塚遺跡[神沢 1983]など分布が拡大し、ほぼ壺棺再葬墓の分布範囲全域に広がるようになるが、千葉県には及ばない。尾張地方は遠賀川文化の進出と方形周溝墓の形成により、壺棺再葬墓はほとんど姿を消す。三河地方では吉胡遺跡[中山ほか 1952]などで確実

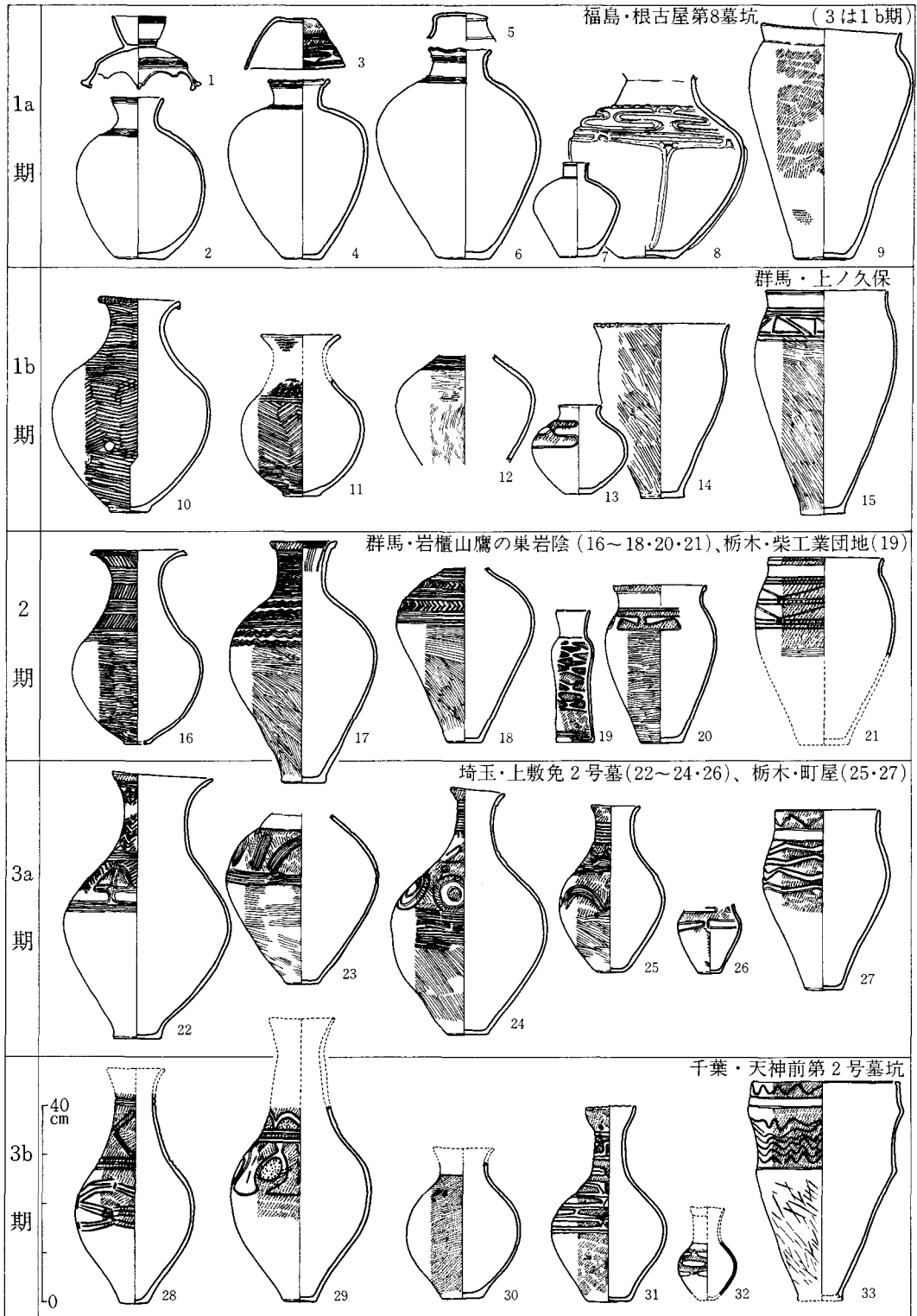


図1 出土土器による壺棺再葬墓の変遷

に壺棺再葬墓が確認でき、東北地方中部以北でも岩手県金田一川遺跡〔亀沢 1958〕に再葬壺棺が知られている。しかしこれらの地方の壺棺は単棺であり、乳児などの単葬棺と区別がつかない。

1 b 期(新)段階：弥生Ⅰ期の青木畑式、御代田式、沖式、水神平式に並行する段階。宮城県葉師堂遺跡〔片倉ほか 1976〕、福島県成田藤堂塚遺跡〔杉原 1968 b〕、群馬県上ノ久保遺跡〔山崎 1959〕、埼玉県四十坂遺跡〔栗原 1960〕、長野県ほうろく屋敷遺跡〔大沢ほか 1991〕などが代表的な遺跡だが、1 b 期(古)段階との間に一線を画すことは困難である。

2 期：弥生Ⅱ期の今和泉式、庄ノ畑式、丸子式、岩滑式に並行する時期。<sup>(1)</sup> 1 b 期(新)段階に萌芽がみられる磨消縄文が多様に展開し、樫王式以来影響を与えてきた条痕文系土器と大洞系の影響を受けて中部高地地方で発達した沈線文系の土器が主体をなす。新潟県村尻遺跡〔石川ほか 1982〕の新しい段階、茨城県小野天神前遺跡〔阿久津 1977〕、群馬県岩櫃山鷹の巣岩陰 A・B 群〔杉原 1967〕、埼玉県前組羽根倉遺跡〔書上ほか 1985〕、長野県上ノ原遺跡〔磯崎 1955〕などがこの時期を代表する。分布は 1 b 期とほとんど変わらないが、福島県以北では見られなくなり縮小の兆しがある。

3 a 期：弥生Ⅲ期の南御山Ⅰ式、野沢Ⅰ式に並行する時期。磨消縄文、太細併用集合沈線文と条痕文の融合が顕著で、胴部下半に条痕調整があるいわゆる平沢型の細頸壺〔関 1983〕が主体をなす。胴部下半がナデ調整の出流原型はその萌芽がみられる〔若狭 1992b〕。福島県宮崎遺跡〔周東 1977〕、栃木県町屋遺跡〔森田ほか 1986〕、埼玉県上敷免遺跡〔関 1983〕などがこの時期の古い段階を代表する遺跡である。長野県の寺所式はこれと並行する。新しい段階のものとしては栃木県戸木内遺跡〔石川ほか 1985〕、埼玉県三ヶ尻上古遺跡〔増田 1976〕、栃木県出流原遺跡〔杉原 1981〕の古い部分などが位置づけられよう。長野県の阿島式はこれと並行する段階である。愛知県では方形周溝墓が広まり、壺棺再葬墓は西のほうから姿を消す。長野県では木棺墓が定着しつつあるが、壺棺再葬墓も継続しており、二重構造をとる。千葉県では壺棺再葬墓が普及する一方、後半には君津市常代遺跡で方形周溝墓が検出されており〔甲斐 1992〕、一定期間の方形周溝墓と壺棺再葬墓の併存は確実である。

3 b 期：弥生Ⅲ期の野沢Ⅱ式に並行する時期。平沢型の細頸壺が 3 b 期には影を潜める一方、出流原型の細頸壺が盛行する。栃木県出流原遺跡の多くの墓坑が 3 b 期を代表する。出流原遺跡の多条の波状文をもち、刺突文が盛行する土器は、3 b 期でも新しい一群である〔鈴木 1982〕。福島県ではすでに 3 b 期には壺棺再葬墓は土坑墓にとってかわられ、長野県でも消滅するようである。埼玉県ではこの時期の方形周溝墓が検出されている。

### 3 再葬のプロセス

#### (1) 再葬プロセスの復元

再葬のシステムを単純化すれば、死の確認→一次葬→二次葬(再埋葬)という 3 段階であることはすでに述べた。再葬のプロセスの復元案はすでにいくつかある〔書上 1988・荒巻ほか 1988〕が、

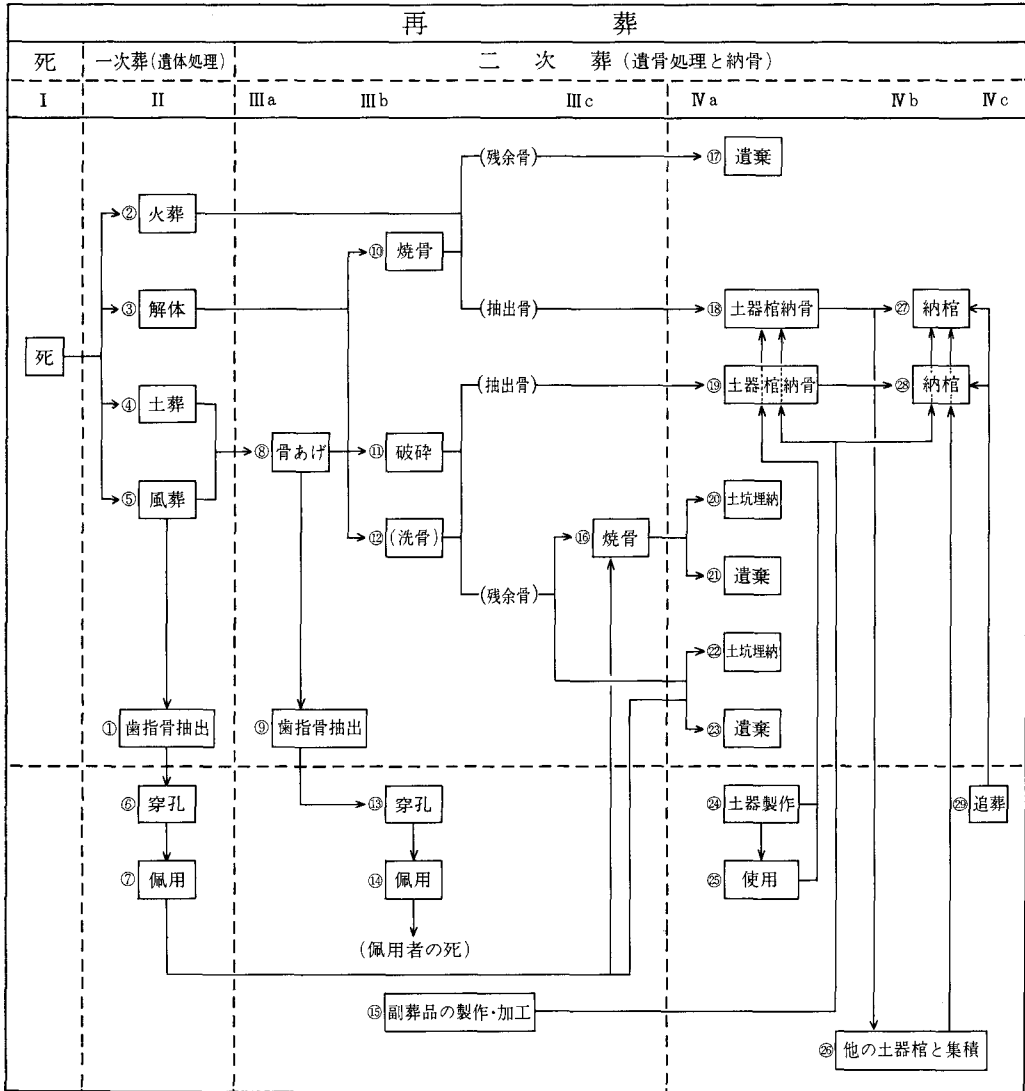


図2 再葬のプロセスモデル

一元化しすぎるきらいがあると指摘されている [石川 1989a]。須藤隆は、納棺から納骨へ至るプロセスのパターンを複数用意して、今後に備えた [須藤ほか 1984]。こうした点に留意しつつ、考古学的な事例をふまえて考えられるケースを網羅的に復元したのが図2である。

一次葬から納棺にいたるII~IVのそれぞれの段階にはいくつかのケースが想定されるが、そのうちのあるものを採用して、特色のある一連の再葬プロセスが遺跡ごと、地域ごとに展開している。実際はもっと複雑であり、死者反生の儀礼や魂振り、魂鎮めといったようなさまざまな儀礼的所作がその間におこなわれたであろうことは、民族・民俗学的事例から類推することができる。しかし、それら無形の儀礼のほとんどは考古学的に証明することは不可能にちかい。また、考古学的に認識できる再葬のほとんどは、再葬の最終過程としての遺構である。つまり、再葬にかか



わるさまざまな営みが集積された形としてとらえ得るのが一般的ありかたであって、その営みひとつひとつがどの段階でおこなわれたものか、なかなか明らかにしがたい実状である。こうした限界を念頭においてこの復元案にもとづき、再葬のプロセスについて考えてみたい。なお、図の中のプロセスを点線によって上下に分けてあるが、上段はある個人の遺体と遺骨の処理に直接かかわる一連の行為であり、下段はそれに付随する遺骨処理や再葬に用いた道具の製作、使用などの行為である。

## (2) 一 次 葬——遺体処理過程——

**死の確認と一次葬** 再葬の第Ⅰ段階は、死の確認である。死の確認においてもさまざまな儀礼的手続きがとられたであろうが、考古学的にそれを証明する資料は得られていない。再葬の第Ⅱ段階である一次葬は、墓地における土器棺が入っていない土坑などから、ある程度推し量ることができる。しかし壺棺再葬墓が発達してくると、墓地のなかでたんなる土坑の存在はまれになる。また、一次葬の際の取り残しの骨と考えられる例もきわめて少ない。一次葬をどこでおこなったかは非常に難解な問題である。とりあえず、一次葬とされている事例に検討を加えることから始めよう。

**土葬** 新潟県六野瀬遺跡〔杉原 1968 a〕からは、壺棺再葬墓に隣接して骨が検出されている<sup>(2)</sup> (図3)。杉原庄介のように、これを一次葬の骨の取り残しとみると、一次葬の場と再葬の場とは同じ場所にあったことになる。この立場に立てば、壺棺再葬墓遺跡にみられる土坑が問題になる。福島県根古屋遺跡〔梅宮ほか 1986〕からは25基の壺棺再葬墓が検出されているが、それらは大きく東西に2分しうる(図13)。2群にはさまれた中間地帯には、第1号土坑墓とされる2×2mほどの土坑が存在している。また西群は再葬墓の重複関係から、さらに3群ほどに分かれるが、そのまんなかの群に隣接して、第1号土坑墓と同様な形態でやや大きい第2号土坑墓が存在している。ともに土坑の中からは人骨が出土しており、大形であるにもかかわらず他に遺物はない。また、第1号土坑墓にはベンガラが敷かれていた。こうした点からすれば、第1号土坑墓が東群に、第

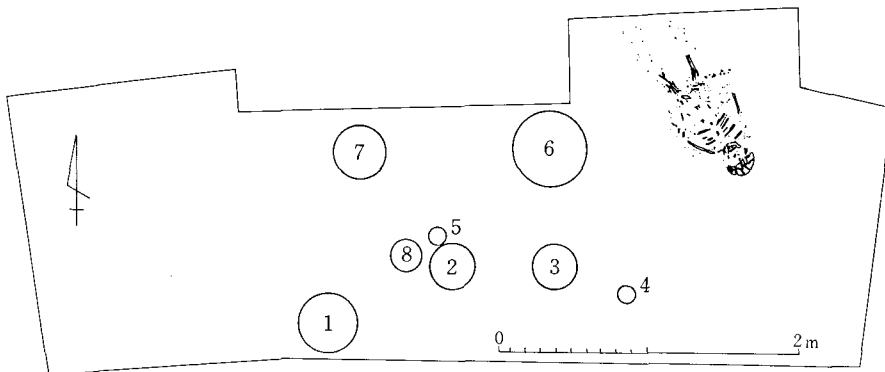


図3 新潟県六野瀬遺跡の再葬墓と人骨(1～8は土器)

2号土坑墓が西群にかかわる一次葬の場であった可能性が考えられよう。墓域が再葬墓で混雑するようになると、第9墓坑を皮切りに、第8・17墓坑にいたる一群の再葬墓が第2号墓坑の上に形成された。これらの一次葬の場はまた別の場所に設けられたのであろう。第3・4号土坑も、あるいは一次葬の場であったかもしれない。

群馬県沖II遺跡では合計27基の壺棺再葬墓が3群に分かれて検出されたが(図15)、それぞれの群に1ないし数個の土坑が伴っており、これが一次葬の施設である可能性が指摘されている〔荒巻ほか 1986〕。これはやはり一次葬の土坑だと考えて、ふたたび再葬に利用されたものとみたい。埼玉県横間栗遺跡は未発表であるが、3a期を中心とした壺棺再葬墓は2~3群にわかれ、再葬墓1基に対して土坑が1基対応するように併存している<sup>(3)</sup>。

以上、図2にもとづき④のケースを想定して、一次葬と考えられる遺構について述べてきたが、これらが一次葬の場であったという保証は実際に得られているわけではない。土坑が一次葬のも

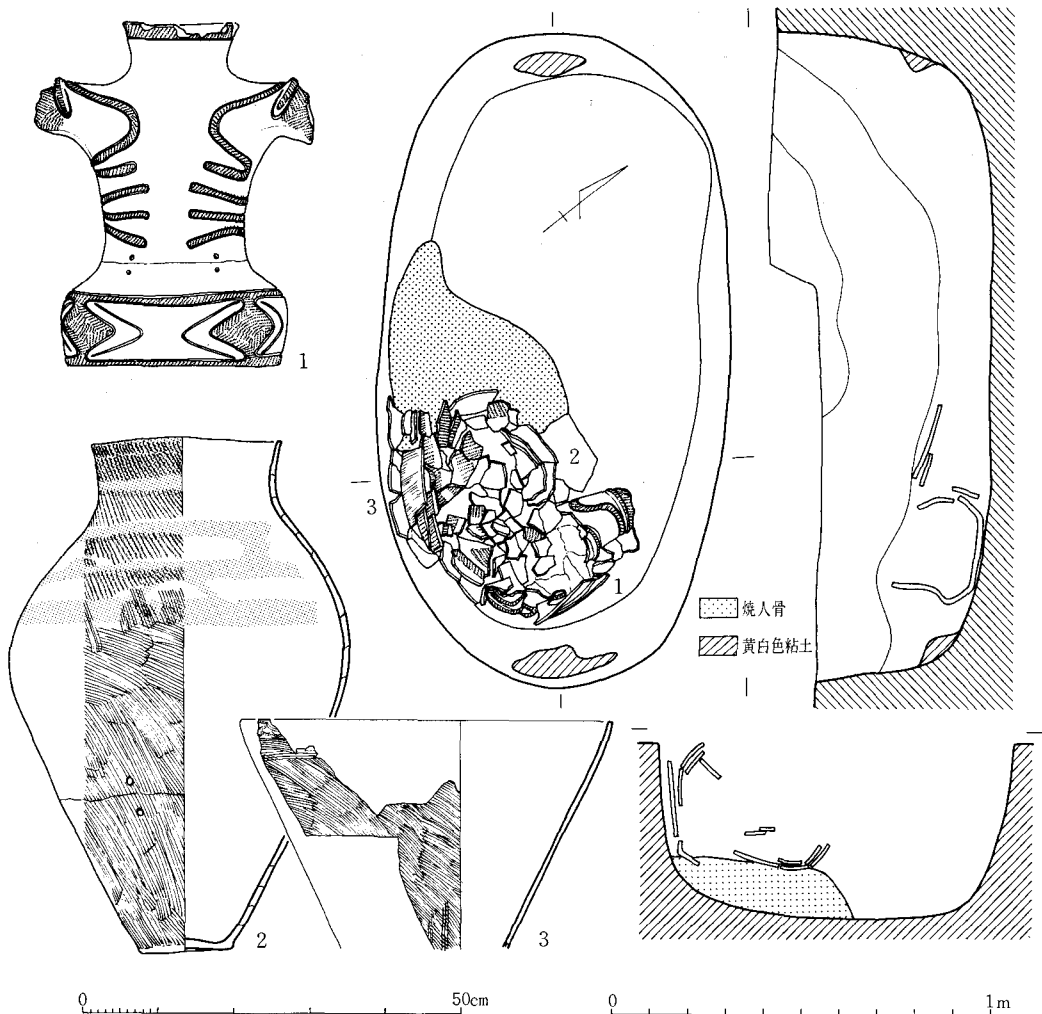


図4 新潟県村尻遺跡12号土坑

のか単葬のものかという識別は困難で、石川日出志がつとに指摘する墓域における単葬の占める割合がどの程度だったのかという問題とも触れ合う。石川は新潟県村尻遺跡12号土坑（図4）を小判形の形態、土坑の南半分からヒト形土器と火葬骨の上ののった形で大形壺が出土していること、棺もしくは遺体を押さえていた土坑の両端の白色粘土、北半分の空間を根拠に単葬と再葬の同居と説く〔石川ほか 1982〕。単葬がどれだけ普遍性をもつか疑問だが、重要な問題であることはまちがいない。

この問題は、土坑と再葬墓間の骨やその他遺物の接合関係を検討することで解決の糸口がみつかる可能性はある。また、縄文晩期の例ではあるが、愛知県伊川津遺跡では再葬墓が一次葬の土坑を取り囲むような状態で検出された〔春成ほか 1988〕。横間栗ともども、再葬墓と土坑との配置状況もこの問題を解く手がかりとなろう。さらに、土坑に掘り返した跡があるか否かという土層の観察が重要である。しかし再葬墓にくらべてたんなる土坑が極端に少ない、あるいはまったくない遺跡も多くあるので、一次葬の場は再葬墓と離れた場所に存在したこともあったのかもしれない。場合によっては、一次葬のありかたとして風葬を考える必要もあろう。

**風葬** 群馬県岩櫃山遺跡群鷹の巣岩陰遺跡は、切り立った山の頂上付近にある壺棺再葬墓遺跡である。しかし、岩手県熊穴洞穴〔小田野ほか 1985〕や群馬県八束脛洞窟〔宮崎ほか 1985〕、三笠山岩陰、只川橋下岩陰〔外山 1986 a・b〕、長野県月明沢岩陰〔西沢ほか 1978〕などの岩陰や洞窟遺跡からは、焼けた人骨は出土するものの、壺棺再葬墓は伴わないのが普通である。春成秀爾は八束脛洞窟に残された多量の焼人骨の解釈として、ここは火葬による遺体処理の場であって、本来の再葬墓は別の場所にあったという考えを示した〔春成 1988 a〕。おそらく本来の再葬墓とは壺棺再葬墓を想定しているのであろうが、後に述べるように原則として再葬墓の壺棺に焼人骨は納めないことを考えれば、壺棺再葬墓に納めたのは土葬ないしは風葬に付された人骨のある部分だったことになる。岩陰の焼人骨は外山和夫らが言うように〔外山ほか 1989〕、土器に納めた人骨の残余を焼いたものとするのが合理的な解釈だろう。

遺骨処理としての二次葬の場を岩陰遺跡に求めれば、同じ場所に一次葬である遺体処理の場を想定するのが自然である。この場合は風葬（ケース⑤）も、土葬とあわせて想定しておくべきだろう。鷹の巣岩陰の人骨に対しては、土器棺から遊離したという解釈とは別に、洗骨の残部の可能性が指摘されている〔杉原 1967〕が、この解釈は藤田等が示しており〔藤田 1966〕、ここが一次葬の場であることが早くから考えられていた。鷹の巣岩陰や幕岩岩陰の人骨が風葬によるものか否かは、岩陰における土坑の有無の確認と化学的な調査を含めた土坑の精査など、遺跡からの情報によって判断すべきだろう。

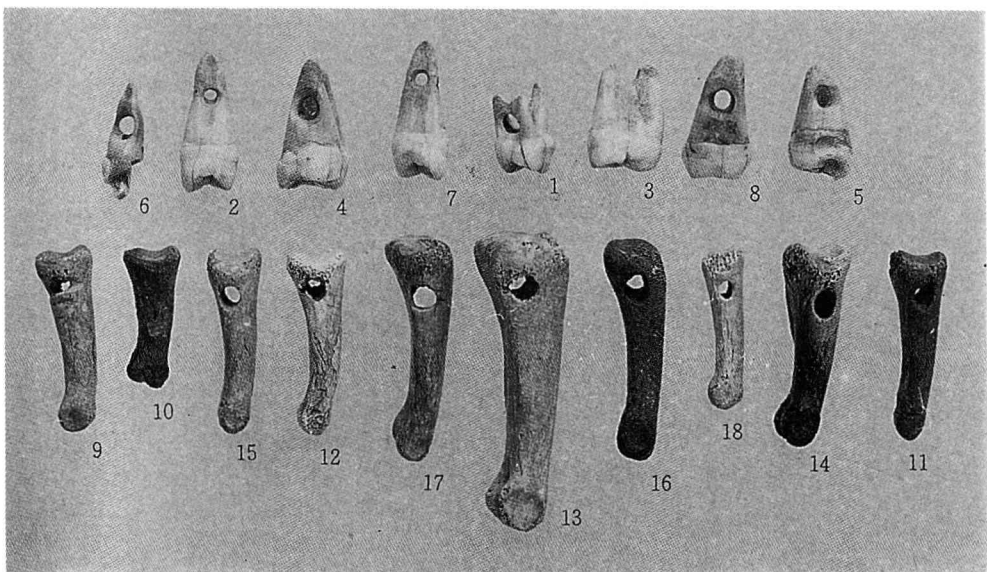
**火葬** 火葬という特殊な葬法によって、土葬・風葬などを経ずに骨化する特殊な場合（ケース②）もありうる。ここで問題になるのが、根古屋遺跡の焼人骨〔梅宮ほか 1986〕である。推定100～200体もの人骨すべてが焼かれており、再葬壺棺にも納められるという異例のものだからである。こうした焼人骨の場合、それが葬送のどの時点で焼かれたものが問題になる。つまり、

ケース②なのか⑩なのか⑯なのか、ということである。根古屋には骨に軟部が付着している状態で焼いた際に生じる、亀裂やねじれのみられる骨が多い〔馬場ほか 1986〕から、完全に白骨化する以前に火にかけたとされている。ならばケース②か⑩かということになるだろうが、⑩から⑳にいたる過程は、④ないし⑤から⑩を経て㉑へいたる過程における第Ⅱ・Ⅲ a 段階が省略され、火葬自体に二次葬としての意義が強まったもの<sup>(5)</sup>と理解するならば、この二者の差異をそれほど強調すべきではないのかもしれない。

**解体** 理論的には、死後直ちに解体される場合(ケース③)も考えられ、春成はそれを主張し、壺棺からしばしば見つかる剝片石器を遺体解体具と考えた〔春成 1986〕。この場合は上述の火葬ともども、骨あげのⅢ a 段階は飛ばされ、遺体処理と遺骨処理がほぼ同時になされたことになる。

**穿孔人歯骨** 再葬にかかわる儀礼的行為としてきわめて注目すべきものがヒトの歯や骨に穿孔し、それを装身具として着用する風習である(写真1)。現在までに知られている穿孔人歯骨出土遺跡のうち、分布や形態にまとまりがあるのは中部・関東・南東北地方の長野県月沢遺跡(1 b 期)、群馬県八束脛遺跡(3 b 期?)、埼玉県わらび沢遺跡(2 期)、新潟県緒立遺跡(1 b 期)、福島県根古屋遺跡(1 a ~ 1 b 期)の5遺跡である〔外山ほか 1989〕。これらは再葬墓遺跡においてのみ検出されることから、この風習は再葬と深いかかわりをもつといえる。

外山和夫らは穿孔人歯骨の亀裂と穿孔の先後関係を観察し、亀裂が熱によってずれているものもあるので、穿孔人歯骨の大部分は熱を加える前に穿孔していることを明らかにし、穿孔していない熱を受けた歯骨と比較して八束脛の穿孔人歯骨は熱を受けていない、あるいはその度合いが弱いと考えた〔外山ほか 1989〕。根古屋遺跡の手中節骨には、明らかにペンダントにする意図で切断しようとした傷のあるものが存在する。これは、軟部がついた状態のうちに素材を取り出そうとしたことを意味し、上述の見解を補強するものであるが、死後ただちになされた(ケース①)



図版 1 群馬県八束脛遺跡の穿孔人歯骨

表1 穿孔人歯骨(数字は個体数)

	小白歯	大白歯	切歯	犬歯	手骨	足骨	頭蓋骨	下顎骨	四肢骨	肋骨
根古屋	1	14			2	6				
緒立					2	1	7	3	6	1
月明沢		1								
わらび沢				1						
八束脛	3	4	1		6	4				

のか腐食が進行した段階(ケース⑨)だったのか問題になる。八束脛の場合は遺棄されたものに焼けたものがごくわずかであることから、再葬された人物が身に着けたまま焼かれたとは考えられず、⑨から⑭をたどり②にいたったことは佩用期間の短さからも考えられないので、①から⑦を経て②にいたったと考えるべきだろう。すなわち死者の近親者が死後余り時間がたたないうちに歯指骨を取り出し、一次葬の期間に佩用して、二次葬の遺骨処理である焼骨の前後に遺棄したものと考えた<sup>(7)</sup>。この考えによると一次葬と二次葬の間にかかなりの期間があったことになり、必然的に②や③のケースは想定し難いことになるが、根古屋や緒立の穿孔人歯骨は焼けており、再葬に付された人物があらかじめ身に着けていたことも考えられるので、この場合は②・③のケースを否定することにはならない。

穿孔された人歯骨の部位は、根古屋は歯と手足の指骨、緒立では手足の指骨や頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、肋骨、八束脛では歯と手の指骨、月明沢とわらび沢では歯と様々である(表1)。時期的には根古屋・緒立・月明沢→わらび沢→八束脛<sup>(8)</sup>であるから、この違いは地域差、あるいは集団差の可能性が高い。外山らの指摘するとおり、同じ再葬墓分布圏に属しながらも、穿孔人歯骨の部位や扱いにおいて明瞭な地域差があることは注目すべきである。

### (3) 二次葬—遺骨処理過程—

**遺骨処理と納骨・納棺** 二次葬のうちの遺骨処理過程が第Ⅲ段階であり、骨にいろいろと手が増えられたのち再び埋葬したり遺棄したりするのが第Ⅳ段階である。それぞれ数段階の手続きを経ている。Ⅲ a 段階は骨あげとその際の選別・抽出作業、Ⅲ b・Ⅲ c 段階が破砕や焼骨など、取り上げた骨に手が増えられる段階である。いわゆる洗骨葬〔金子 1968〕は、Ⅲ b 段階の行為が葬制の代名詞となったものであり、骨に肉がついていると霊が祖先の仲間入りできないからと、酒などできれいに洗うのである。その意味するところまでが弥生時代の壺棺再葬におけるそれと同じとは考えられないが、取り上げた骨に手を加えるという行為は共通しており、再葬過程における同一の段階と想定できる。土器棺に骨を納めるⅣ a 段階を納骨、納骨した土器棺を土坑などに納めるⅣ b 段階を納棺とする。Ⅳ c 段階として理論的には土器棺の追葬が想定できる。

**焼人骨の問題** 一次葬を遺体処理過程としたが、火葬はまさに遺体処理としておこなわれるものである。これに対して、取り上げた骨に肉が付いていたとき、完全な骨にするため、あるいは

は細片にするための遺骨処理として骨が火にかけられる場合がある。これは二次葬の過程で、洗骨などと同じ目的でおこなった可能性が考えられる。

焼けた人骨は福島県窪田遺跡〔古川ほか 1987〕、新潟県村尻遺跡、群馬県沖II遺跡、押手遺跡〔石井 1985〕のように土坑や、茨城県小野天神前遺跡のようにピットから出土したり、岩陰遺跡で大量に検出される〔石川 1988〕。一方、再葬壺棺に納めた人骨は焼けていないのが一般的である〔荒巻ほか 1988〕。栃木県出流原遺跡第20号墓坑の焼人骨は壺棺の中から検出されたものか不明であり、茨城県小野天神前遺跡11号土坑の壺棺から出土した焼人骨、焼獣骨は、他の土坑の覆土から出土した焼獣骨、鹿角とともに包含層からの混入の疑いがある。これらと分布のはずれにある長野県篠ノ井遺跡群鉄塔地点例〔青木ほか 1990〕、愛知県吉胡遺跡例〔清野 1949〕、そして先に述べた根古屋遺跡例を除くと、再葬土器棺から出土する人骨は焼けていないのが一般的で(表3)、焼人骨は埼玉県上敷免遺跡に例があるにすぎない〔飯島ほか 1987〕。焼人骨は一次葬の火葬によって生じた可能性は捨てがたいものの、再葬墓地帯では墓坑内火葬人骨が一例も検出されていないので、二次葬の過程で生じたものが普通であったと考えたい。群馬県、埼玉県の再葬土器棺から出土する人骨は焼けていないので、岩陰遺跡に残された焼人骨はそこでおこなわれた二次葬の残余骨を焼いて処理したものと考えてよいだろう。したがって、これらの焼人骨はケース⑩を経たケース⑰・⑳に相当する。

沖II遺跡や福島県鳥内遺跡〔目黒ほか 1971〕には底に石を敷いた土坑が存在するが、沖II遺跡のAD 25号土坑からは焼人骨が多量に得られた。この遺跡の再葬土器棺の中から出土した骨は焼けていなかったもので、④ないし⑤から⑪ないし⑫を経たものが、㉘にいたる過程と、⑯を経て㉙にいたる過程をたどったとみられる。土坑自体は焼けていないので、焼人骨はおそらく焼骨の場合から持ちかえられて埋納されたのだらう<sup>(9)</sup>。報告者はこれら骨を焼いた場所が、遺跡で検出された焼土遺構であるとするが、この焼土に骨が含まれているとは報告されていない。骨を焼いた場所は、少なくとも発掘区以外に求めるべきだろう。このように、焼けた人骨もその背景は複雑である。

**破碎骨の問題** 人骨を破碎、あるいは粉碎する行為は、壺棺再葬に特徴的なものである。1 b期の山形県生石2遺跡では、葬送儀礼の過程を彷彿させる状況がとらえられている(図5)。約20m隔てて、北と南にはそれぞれ土坑群と再葬墓群が群在するが、土坑の一つSK55には骨粉が含まれている。土坑群に接した南には3個の40cm大の台石を中心に、約10m四方にわたって破碎された骨粉が多量に散らばっている。その南には壺棺再葬墓が7基検出されている〔小野 1987〕。これらの骨が人骨か否かが問題であろうが、もし人骨であるとすれば、報告者もいうように、土坑に葬ったヒトの骨(ケース④)を取り出し(⑧)、台石の上で碎き(ケース⑪)、壺に納めて(ケース⑰)土坑に葬った(㉘)という、第II段階から第IV段階まで再葬の一連の過程が想定復元できる。1 b期の岩手県熊穴洞穴からは7体の人骨が出土しているが、いずれも骨の部位に偏りがあり、破碎された痕跡、焼けた痕がある。この場合はケース⑪を経た㉙、㉚と考えられる。鷹の巣岩陰の散乱骨は、一次葬の取り残しというほかに、ケース㉚の可能性も残しておくべ

きだろう。再葬壺棺から出土する人骨は骨片にすぎないものが多いのは、破碎行為が多くおこなわれていたこと、そして土器に納められるのはほんの一部で事足りた〔春成 1988 a〕と理解できるのであり、そうした行為は縄文時代の再葬の延長上に位置づけられる<sup>(10)</sup>。

この段階でも骨上げを経て歯指骨を抽出し加工する工程（ケース⑨→⑭）が想定されるが、実際に八東脛遺跡では火を受けた後の手指骨に穿孔したものが出土している。

**納骨** 骨を納めた土器、すなわち土器棺は専用の蔵骨器として作られたのか、それとも日常の土器が転用されたのかという問題がある。つまり⑭から直接⑮・⑯にいたるのか、⑭から⑮を経てこれらにいたるのか、である。この問題は、理想的には再葬墓を含む遺跡の、墓にかかわらない同時期の生活遺構や遺物包含層における土器の使用痕と比較することによって、解決の糸口は見いだせよう。沖II遺跡は遺物包含層と再葬墓が併存する遺跡である。この遺跡の包含層からは、再葬壺棺と変わらない壺形土器が多数出土しているので、再葬土器棺の多くは日常品の転用だったと推察されるが、顔面付土器や愛知県や北関東地方にまれにみられる極めて大形の壺形土器は、専用棺の可能性はある〔石川 1987〕。とはいうものの日常生活の比較資料を欠いており、この点に関しては表面的な観察以外に、化学的な分析などをおこなうことが望まれる。

表3は再葬墓出土人骨である。骨の検出例は決して少ないとはいえないが、ほとんどが骨片や骨粉であり、性別や年齢はもとより部位なども判然としないものが多い。地域ごとに性別・年齢が分かるものの数を集計したのが表2である。性別に関しては、例数が少ない中部高地のほかは女性もみられるが、男性がやや多い。次に年齢であるが、縄文時代の埋葬遺跡の少年の比率は低いのが常態であり、ある程度の年齢に達すると成人まで生きのびるものが多かったと考えられるので、再葬に少年が占める比率の低さは納得できるが、成人と小児以下の数がおおよそ拮抗する一般的な比率がここではみられず、小児が少ない。この傾向は包含層から7体の人骨が出土した新潟県緒立遺跡〔渡邊ほか 1987〕でも指摘できる。しかし、再葬を経た残余の人骨が100～200体ある根古屋遺跡や、最少34体ある八東脛遺跡では胎児から老年まで男女の差がないとされており、表

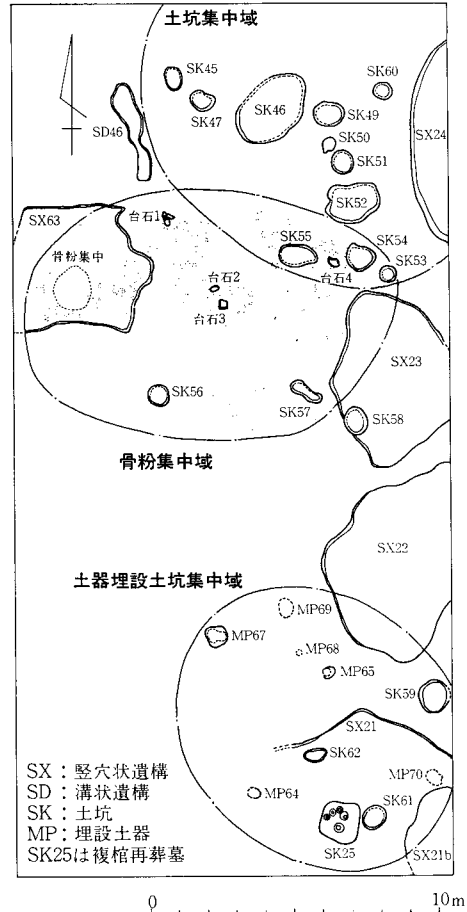


図5 山形県生石2遺跡

表2 再葬墓出土人骨の性と年齢  
( )は個体数のうちの土器棺内の人骨数

	東北地方	関東地方	中部高地	東海地方
成人男性	9(4)	5(4)	4	
成人女性	2(1)	3(2)		1(1)
成人?性	6(5)	6(6)		4+(4+)
女or少年	2(2)	1		
少年	1	1		1(1)
小児	3(2)	1		
乳幼児		1(1)	1	

2の数値は例数が少ないために偏りが生じている可能性も考慮しなくてはならない。

次に、再葬土器棺に納めた人骨の部位である。岩手県金田一川遺跡からは蓋付壺棺が検出されているが、中には35歳くらいの男性の骨を納めていた。それは頭蓋骨・上腕骨・尺骨・大腿骨・寛骨・椎骨・顎骨・肋骨など全身のおよそ55%に相当する。つまり、納骨にあたり、全身の骨をくまなく選択しているのである。これは顕著な例であるが、

福島県牡丹平遺跡〔永山 1977〕にもその傾向があり、根古屋遺跡においても同様な例を指摘することができる。たとえば、根古屋の3号墓坑、6号墓坑、7号墓坑、19号墓坑、21号墓坑などである。愛知県吉胡遺跡〔中山ほか 1952〕でもほぼ全身の骨を納めたものがある。

一方、関東、中部高地地方ではどうか。茨城県殿内遺跡第9号、10号小堅穴〔杉原ほか 1969〕や埼玉県上敷免遺跡1号、2号再葬墓〔蛭間ほか 1978〕などの壺からはヒトの歯だけが検出されている。これは、歯が他の部位にくらべて残りやすいという条件もあろうが、栃木県出流原遺跡第11号墓坑の壺からは下顎の歯だけが見つかり、上顎の歯は一本も検出されなかったところをみると、下顎だけ納棺した場合もあったと考えられる。埼玉県横間栗遺跡1号再葬墓の壺形土器〔金子 1988〕には長管骨を、千葉県天神前遺跡第1・2号墓坑の壺棺〔杉原ほか 1974〕にも長管骨を意識して集めている。中部高地では検討しうる資料はほとんどない。

骨の残存や消滅の条件は様々で、こうした例から一般的な傾向を引き出すことは危険だが、岩手、福島、愛知など東北や東海地方の壺棺再葬墓に全身の骨から抽出して再葬する例があるのに対して、関東地方ではそれはなく、むしろある部分の骨を納めるにとどまる傾向のある点は指摘できる。杉原荘介は関東地方のこの現象をとらえ、納骨に先立つ段階(Ⅲc段階)で骨が選択されており、再葬自体が儀式化しているとし〔杉原 1981〕、石川もそれを踏襲している〔石川 1988〕が、部分骨再葬と残余骨の処理としての焼人骨葬の相互関係のなかでその性格を論じる必要があることを別稿で指摘した〔設楽 1993〕。こうした再葬に際しての骨の選択は、縄文時代にもすでに地域差がみられたが、弥生時代の再葬もその伝統を受け継いでいる可能性をここでは指摘するととどめる。別に壺棺再葬墓の起源をまとめた原稿を用意しているので、そこで論述することにしよう。また、頭蓋骨が特別選ばれることもなく、残余の骨の中にも混じるように、特別視されている傾向は見出せないことも付け加えておきたい。

それでは一つの土器棺に納めた人骨は1体だったのか、それとも複数だったのか。根古屋遺跡の再葬土器棺からは多量に人骨が出土しているが、焼けた部分骨ばかりであり、1体か数体かは判断しにくい。しかし、8号、16号、21号の各1個体、19号の2個体の土器棺には、明らかに2



表3 東日本の再葬墓出土人骨（縄文晩期終末～弥生時代）

県・遺跡名	遺構名	時期	施設	人骨人数：部位	性：年齢	特 徴	文 献	
岩手・金田一川	なし	1 b 期	壺	1 体：頭上腕尺大腿 寛椎脛肋骨	男：35歳	骨は全身の55%	亀沢 1958	
山形・生石 2	SK55	1 b 期	土坑	骨粉	？	大礫周辺骨粉多量	小野 1987	
	SX63	1 b 期	土坑	骨粉	？			
	台石遺構	1 b 期		骨粉	？			
岩手・熊穴洞穴	1 号人骨	1 期	小土坑	1 体：頭骨 体部の 骨ほとんどない	男：壮年	土器片敷 破砕獣骨 炭化物散乱 抜歯	小田野ほか 1985	
	3—2 号人骨	1 期	岩陰	1 体：頭骨・大腿骨・ 肋骨	男：壮年			破砕獣骨・炭化物 体部の骨は少ない
	3—1・3 ～6 号人骨	1 期	岩陰	5 体：頭骨・下顎骨・ 四肢骨・椎骨	男壮年 2 女壮年 1 他は不明			切断、破砕 抜歯 焼けた下顎あり 壺・深鉢破片加熱
宮城・青木	昭和33出土	2 期	？	指頭大の骨片	？	30cmの所に再葬壺棺	伊藤 1960	
	昭和35出土	2 期	？	1 体：不明の細片	小児	焼骨		
福島・窪田	C 1 号土坑	2 期	壺	骨粉 1 点	？	トチの実20個入	古川ほか 1987	
	D12号土坑	3 期	土坑	1 体？：頭・下顎骨 15片・四肢骨数片	男の可能 性：熟年	焼骨 変形収縮亀裂		
福島・牡丹平	なし	1 b 期	壺	1 体：頭下顎肋大腿 腕尺脛腓骨	？：成人	焼骨 全身の骨から 抽出 4 系抜歯	永山 1977	
福島・根古屋	1 号墓坑	1 a 期	2 号壺	1 体？：頭骨 2	？	焼骨 (0.4g)	梅宮ほか 1986	
	2 号墓坑	1 a 期	4 号壺	1 体？：脛・長管 3	？	焼骨 (8g)		
			1 号壺	1 体？：頭骨30・四 肢骨100	？	焼骨 (307g) 全身の骨から抽出		
	3 号墓坑	1 a 期	2 号壺	1 体？：骨片 9	？	焼骨 (8g)		
			3 号壺	1 体？：頭骨20・四 肢骨20・椎骨	？	焼骨 (120g) 全身の骨から抽出		
			4 号壺	1 体？：頭骨 3・四 肢骨10余点	？	焼骨 (13g)		
	4 号墓坑	1 a 期	5 号壺	1 体？：頭骨 2・四 肢骨10余点	？	焼骨 (19g)		
			1 号壺	1 体？：頭骨 3・他	？	焼骨 (18g)		
	6 号墓坑	1 a 期	2 号鉢	1 体？：頭骨30・長 管骨	男：成人	焼骨 (185g) 全身の骨から抽出		
			3 号壺	1 体？：頭骨10・四 肢骨10余点	？	焼骨 (85g)		
	7 号墓坑	1 a 期	1 号壺	1 体？：頭骨数片・ その他20ほど	？	焼骨 (28g)		
			5 号壺	1 体？：頭骨約10・ その他100	？	焼骨 (94g) 抜歯 全身の骨から抽出		
	8 号墓坑	1 期	1 号甕	1 体：頭骨 1	？	焼骨 (2g)		
2 号壺			3 体以上：頭骨 9・ その他20余点	？：成人 2・小児 1	焼骨 (73g)			
10号墓坑	1 a 期	1 号鉢	1 体？：長骨 4 他	？	焼骨 (7g)			
		2 号壺	1 体？：頭骨 1 他	？	焼骨 (17g)			
11号墓坑	1 b 期	2 号？	1 体？：頭 3・他 7	？	焼骨 (4g)			
12号墓坑	1 b 期	1 号壺	1 体？：四肢10数	？	焼骨 (16g)			
13号墓坑	1 b 期	1 号壺	1 体？：頭骨 2	？	焼骨 (3g)			
		2 号壺	1 体？：頭骨 5・そ の他50	？	焼骨 (58g)			

県・遺跡名	遺構名	時期	施設	人骨人数：部位	性：年齢	特徴	文献
福島・根古屋	14号墓坑	1 a 期	1号壺	1体?：頭骨10ほど・その他10数点	?	焼骨 (64g)	
	15号墓坑	1 a 期	1号壺	1体?：頭骨8・その他20ほど	?	焼骨 (22g)	
			4号壺	1体?：頭骨1・腓骨1・その他3	?	焼骨 (12g)	
			5号壺	1体?：頭骨6・その他10余点	?	焼骨 (35g)	
			6号甕	1体?：頭骨1・その他3	?	焼骨 (7g)	
			1号鉢	1体?：四肢骨数片	?	焼骨 (3g)	
	16号墓坑	1 期	3号鉢	1体?：頭骨2・その他20ほど	?	焼骨 (14g)	
			4号壺	4体以上：成人2歯椎胸鎖指・少年1上腕・幼児1歯頭足他	?：成人2・少年1・小児1体	焼骨 (214g) 上顎に抜歯	
			5号壺	1体?：頭骨数片・その他20	?	焼骨 (33g)	
			2号壺	1体?：頭骨6・その他50ほど	?	焼骨 (37g)	
	17号墓坑	1 b 期	2号壺	1体?：頭骨6・その他50ほど	?	焼骨 (37g)	
	19号墓坑	1 b 期	1号壺	1体?：頭骨数片・その多数10片	?	焼骨 (20g)	
			2号壺	1体?：大腿骨2	?	焼骨 (2g)	
			3号壺	1体?：頭骨14・その他30余	?	焼骨 (108g) 抜歯 全身の骨から抽出	
4号壺			2体以上：成人骨80余・小児骨20余	?	焼骨 (136g) 焼シカ手根骨混		
5号壺			2体以上：頭骨・頰骨・上顎骨・四肢骨	男：成人 女：成人 or少年	焼骨 (370g) 全身の骨から抽出		
20号墓坑	1 a 期	1号鉢	1体：尺骨	女：成人	焼骨 (10g)		
21号墓坑	1 a 期	1号壺	2体以上：頭骨10弱・その他数10点頭骨・尺骨など	男：成人 女：成人 or少年	焼骨 (126g) 全身の骨から抽出 きゃしゃ		
包含層(骨層)	1 期	—	推定値100~200体全身の骨	男女差無 各年齢	焼骨 全身骨から抽出 穿孔人歯骨23個		
福島・武ノ内	第1号墓坑	1~2 期	土坑	骨粉	?	炭化物混	大槻ほか 1986
	第2号墓坑	1~2 期	壺	骨粉(多量)	?		
	第3号墓坑	? 期	?	骨粉	?	炭化物混	
	第5号墓坑	2~3 a 期	壺	骨粉(多量)	?		
			壺	骨粉(多量)	?		
	第6号墓坑	3 a 期	3号壺	骨粉(多量)	?		
福島・鳥内	S 1号	1 b 期	壺	骨片	?		目黒ほか 1971
			甕	骨片	?		
	S 2 a 号	1 a 期	壺	骨片	?		
	S 2 b 号	2 期	鉢	骨片	?		
	S 3号	? 期	土器	骨片	?		
	S 4号	? 期	土器	骨片	?		
	191号土器	? 期	土器	骨片	?		
D 7号	中期	土坑	骨片	?			
茨城・小野天神前	7号土坑	? 期	土坑	骨片：四肢骨?	?	焼骨 包含層の骨混入?	阿久津 1979・ 飯島ほか 1987

県・遺跡名	遺構名	時期	施設	人骨人数：部位	性：年齢	特徴	文献
茨城・殿内	1号小竪穴	1b期	壺	1体：第1大臼歯	？：20歳	同一人の分骨収納？ 歯だけを納入？	杉原ほか 1969
	8号小竪穴	1b期	壺 鉢	1体：軀・中手骨 1体：頭・下顎骨・ 上顎左第1切歯	男：30歳 男：30歳 前後		
	9号小竪穴	1b期	壺	1体：歯2本	？：20歳		
	10号小竪穴	1～2期	壺	1体：歯7本	女：30歳		
栃木・出流原	第7号墓坑	3期	壺	骨片	？	上顎歯なし 焼骨	杉原 1981
	第11号墓坑	3期	10号壺 11号壺	1体：大臼歯4本 骨片	？：成人 ？		
	第20号墓坑	3期	？	骨片	？		
	第26号墓坑	3期	？	骨片	？		
群馬・押手	？	1b期	大形壺	？体：足の骨	？		石井 1985
	？	1b期	土坑	？	？		
群馬・沖Ⅱ	AU-1	1b期	甕 ピット	？体：歯3・骨3 ？体：ヒトの歯2	？	水洗で検出 小動物骨共伴	荒巻ほか 1986
	AU-4	1b期	壺	骨片	？	水洗で検出	
	AU-10	1b期	壺	骨片8	？	水洗で検出	
	AU-17	1b期	壺	？体：歯2・骨13	？	棺内下層で検出	
	AU-18	1b期	壺	骨片4	？	棺内下部で検出	
	AU-25	1b期	甕	骨片	？	水洗で検出	
	AD-25	1b期	土坑	ヒトの歯418・鹿猪歯 7・骨片530	6～20歳 以上	焼骨 土坑床石敷 土坑数回掘り返し	
群馬・鷹の巣岩陰	なし	1～2期	岩陰	2体以上：頭骨・四肢骨などの一部	男：20歳 女：？歳		杉原 1967
群馬・幕岩岩陰	？	？	？	人骨	？	焼骨	杉原 1967
群馬・蝦夷穴岩陰	？	？	？	骨片2・臼歯2	？	獣の歯牙1共伴	杉原 1967
群馬・八束脛洞穴	B洞	3期	岩陰	骨片	男・女： 小児～老年	焼骨 抜歯あり 穿孔人歯18個	宮崎ほか 1985
	D洞	3期	岩陰	骨片 最少34個体			
群馬・三笠山岩陰	なし	？	岩陰	1体：骨片・顎骨	？：少年	焼骨 歪み・亀裂有	外山 1986 a
群馬・只川橋下岩陰	なし	？	岩陰	2体以上：骨片	女：壮・ 熟	焼骨もあり	外山 1986 b
埼玉・横間栗	1号再葬墓	1期	壺			壺の内外に人骨あり	金子 1988
	6号再葬墓	3期	壺	歯			
埼玉・上敷免	1号再葬墓	3期	壺	1体：歯9	？：壮～ 熟	焼骨 焼獣骨片伴出	飯島ほか 1987
	2号再葬墓	3期	壺	1体：歯5	？：壮年	焼骨 焼獣骨片伴出	
		3期	壺	1体：四肢骨	？：成人	焼骨 焼獣骨片伴出	
埼玉・飯塚南	2号再葬墓	3期	壺	骨片・歯	？		荒川 1988
埼玉・わらび沢岩陰	なし	2期	土坑	骨片	小児	穿孔人歯1個	吉田町 1982
千葉・天神前	第1号墓坑	3期	壺 壺	1体：左脛骨 1体：頭・膝蓋骨・ 左焼骨・左尺骨	男：成人 女：成人		杉原ほか 1974

県・遺跡名	遺構名	時期	施設	人骨人数：部位	性：年齢	特徴	文献	
千葉・天神前	第2号墓坑	3期	壺	1体：上腕・脛骨・骨粉	男：成人	土坑の脇に伸展葬	熊野 1975	
	第3号墓坑	3期	壺	骨片	?			
	第4号墓坑	3期	甕	骨片	?			
	第5号墓坑	3期	壺	骨片	?			
	第6号墓坑	3期	壺	腰骨?片	?			
	なし	3期?	?	1体	?：成人			
東京・久ヶ原	なし	後期	壺	1体：四肢骨・肋骨	男：20歳		簡野 1934	
神奈川・中屋敷	?	2期	土偶形容器	骨・歯	初生児	容器は径1mの灰状焼骨片中	甲野 1939	
神奈川・平沢北開戸	なし	3期	壺	骨片	乳幼児		亀井 1955	
神奈川・西ノ浜洞穴	2号人骨	後期	洞穴	1体：頭骨・四肢骨	?	頭骨を四肢骨で囲む	西ノ浜 1983	
神奈川・大浦山洞穴	なし	中～後期	洞穴	頭骨・四肢骨など	?	2カ所に集骨	横須賀 1984	
神奈川・間口洞穴	8号人骨	中～後期	洞穴	1体：頭骨・肋骨・椎骨	女：20歳	頭骨を岩礫で囲む	神沢 1975	
新潟・村尻	第5号土坑	2期	1号壺	骨片	?	骨は底部付近にあり	石川ほか 1982	
	第12号土坑	2期	土坑	骨片(椎骨・肋骨・四肢骨・指骨)	?：壮年～熟年	焼骨(115g)		
新潟・六野瀬	なし	1～2期	散乱	1体：散乱人骨	?	壺から約1m離	杉原 1968a	
新潟・緒立	なし	1～2期	包含層	最低7体：全身各部分の骨1000	?：成人・若年	焼骨 41系抜歯あり 穿孔人骨20以上	渡邊ほか 1983	
山梨・岡	?	3a期?	土偶形容器	骨・歯	幼児	容器は2個体ともに人骨入	八代町 1975	
長野・松節	4号木棺墓	3期	木棺	長管骨の集積	?	2体合葬の1体	山口ほか 1986	
	24号木棺墓	3期	木棺	足元に集骨	?	3体合葬の1体		
長野・篠ノ井	?	1期	壺	?	?	焼骨	青木ほか 1990	
長野・鶴萩七尋岩陰	なし	2期	壺	?体：大腿骨・肋骨	?	壺は骨に被さる	綿田教示	
長野・腰越	?	2期	土坑?	歯牙・骨片	?	土偶形容器共伴	和田 1917	
長野・月明沢	なし	1期	岩陰	5体：四散骨	男：成人4・幼児1	焼骨 穿孔人歯1有	西沢ほか 1978	
長野・上直路	?	後期	土坑	1体：尺桡上腕骨	?	焼骨	林 1985	
愛知・吉胡	4号甕棺	1b期	壺	2体：各部分	?：成人・10～12歳	再葬か否か不明	中山ほか 1952	
	5号甕棺	1b期	壺	1体：?	?：成人			
	6号甕棺	1b期	壺	1体：少量	?：幼児			
	7号甕棺	1b期	土器	1体：上膊骨ほか	?：成人			
	173号	?	壺	数体	?：成人			焼骨
	252号	?	壺	1体：尺骨・橈骨	女：成人			焼骨

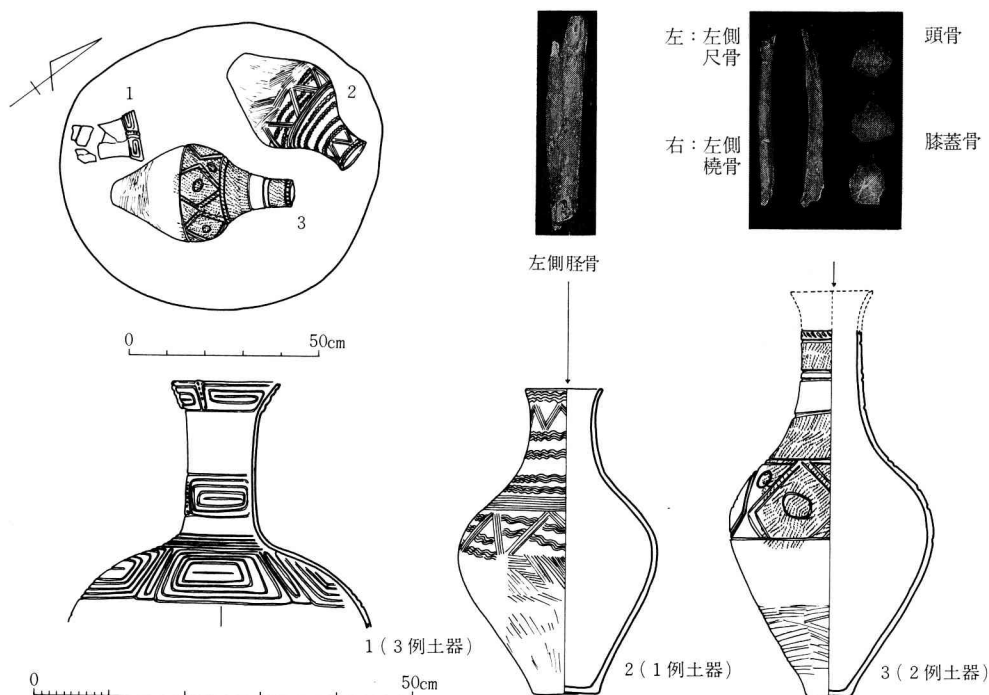


図6 千葉県天神前遺跡第1号墓坑

～4体以上の複数体を納めていた。この遺跡の人骨は2・3・6・7・19・21号土器棺出土人骨のように、全身の骨からくまなく抽出しているものもあるので、火葬ないしは焼骨の後も個体は識別されていたのであり、報告者のいうとおり焼人骨の山から無差別に骨を集めて納骨したものではないだろう。ならば、ひとつの棺に複数の個体が混じるのも偶然とは考えがたいのであり、土器棺から骨が検出できた37例中の5例と比率は低いが確実に存在していたといえる。

根古屋遺跡のこれらの年齢と性別の組み合わせでは、成人と少年、小児の合葬が2例（8・16号墓坑）あり、血縁的なつながりの可能性を考えさせる。そのうちの成人は2体以上であり、別の2例（19・21号墓坑）の成人男性に伴う骨が少年ではなく成人女性であるとすれば、これら成人の組み合わせが夫婦の合葬なのか血縁的な関係をもったものか問題になるところであるが、これだけのデータからは結論できない。この遺跡の人骨はすべて焼けており、土器棺には焼人骨が納められるという特殊な一面がみられるため、他の遺跡の例と同列に扱えるか疑問がないわけではない。また、愛知県吉胡遺跡の173・252号棺〔清野 1949〕にも焼けた人骨数体分を納めていたが、これは分布からみても関東地方のものとは同列に扱えない。

そこで根古屋と吉胡以外の例をみると、福島県牡丹平遺跡、栃木県出流原遺跡の1個体、茨城県殿内遺跡の3個体、埼玉県上敷免遺跡の3個体、千葉県天神前遺跡の3個体の土器棺から1体分しか出土しておらず、その他の遺跡の例はいずれも骨片や骨粉であり、個体数は不明である。つまり、根古屋・吉胡例以外には一つの棺から複数の個体が出土した例は今のところないのである。とほいうものの1棺1体の原則は茨城県殿内第8号土坑、あるいは上敷免2号再葬墓例のよ

うに、一つの土坑の中の2個の棺に1体を分骨した可能性をもつものがあるため慎重にならざるをえない〔杉原ほか 1969, 石川 1987〕し、すべての土器が蔵骨器であったという保証もない。したがって、杉原がかつて土器の数で当時の人口を割りだそうとした試み〔杉原 1981〕はその前提に問題があり適用できないが、さりとて明確な法則性も乏しいデータから導き出すことはできない。ここでは関東地方には一つの土器棺に複数の遺体を納めたものはないが、福島や愛知県には一つの土器棺に複数の遺体を納めた合葬があるという地域的な違いの可能性を推定するにとどめる。

**納棺** 土坑に再葬土器棺を納める方法は、たとえば東海地方と東北地方とではきわだった違いをみせる。東海地方は一つの土坑に一つの土器棺を納める単棺型であり、東北地方などでは複数の土器棺を一つの土坑に埋納した複棺型が主流である。複棺再葬墓は北は山形県、宮城県から南は長野県にまで広く分布し、いわゆる狭義の再葬墓のメルクマールともなっているが、複棺再葬墓が卓越する地域でも、茨城県女方遺跡のように41基の壺棺再葬墓のうち不明の1基を除いてすべて複棺型というものもあれば、茨城県殿内遺跡や群馬県沖II遺跡のように単棺型が主流をなす遺跡もある。こうした単棺型の壺棺再葬墓が東海地方の影響下にあるのか、あるいは複棺型が主流をなす地域におけるバリエーションにすぎないのか、が問題になるだろう。それは壺棺再葬墓の起源と伝播の問題とも関連してくるので、これも別稿で論じることとする。

前節で、一つの土器棺に納めた人骨を検討した。それらを複数納めた複棺再葬墓は、一つの土坑に何体分の人骨を納めたのだろうか。根古屋の複棺再葬墓の土器棺から骨が検出された土坑は18ある(表3)。そのうち7例が合計1体で、11例が合計2体以上であった。性別や年齢の組み合わせは不明だが、一土坑合計2～4体が多く7体が2例ある。関東地方でも、千葉県天神前遺跡に一つの土坑における2個の土器棺のそれぞれに男女の人骨を納めていた例(図6)がある。人骨とは別に、土器棺の型式学的検討などによる複棺再葬墓の形成過程を分析することにより、この課題に接近する方法がある。複棺再葬墓の形成過程などにまつわる諸問題、たとえば複棺再葬墓がIV b段階からIV c段階への過渡期に土器棺が集積された後、なんらかの契機に一気に埋納されたのか(ケース⑳)、それともIV c段階として想定した土器棺の追葬によって形成されたのか(ケース㉑)といった問題は、再葬の原理にまでかかわる根本問題をはらんでいると思われるので、次章で検討する。

**副葬** IV a段階の納骨やIV b段階の納棺の際に、土器棺や土坑に副葬品が添えられる。副葬品の品目は、剝片石器、管玉、勾玉、白玉、小玉、石鏃などであるが、剝片石器と管玉がその筆頭であり、他は少ない。副葬の習俗は1 a期は圧倒的に少なく、根古屋に剝片石器を副葬した例がみられるにすぎない。剝片石器は1 b～2期に集中するのに対して、1 b期から副葬が始まる管玉は2期にも極めてまれであり3期に盛行するので、大局的には剝片石器→管玉という変化が考えられる(表4)。

北陸地方を中心とした玉生産は、縄文晩期終末にはほとんどみられなくなる。山形県石田A遺跡〔宇野ほか 1983〕の1 b期の管玉はエンタシス状に中膨らみになるもの(図7-1)であり、縄

表4 再葬墓出土副葬品

剥片

管玉

<p>1期 山形・石田1-2                  福島・墓料10-1                  ●福島・根古屋3-3                  茨城・殿内7-1                  群馬・上人見                  ●群馬・沖Ⅱ1-2                  群馬・沖Ⅱ2-1                  群馬・沖Ⅱ2                  群馬・沖Ⅱ13                  群馬・沖Ⅱ14                  ●群馬・沖Ⅱ17-1                  群馬・沖Ⅱ21                  群馬・沖Ⅱ22-1                  群馬・沖Ⅱ22                  群馬・沖Ⅱ23-1                  ●群馬・沖Ⅱ25                  長野・ほうろく屋敷A3-1</p> <p>2期 新潟・村尻12                  新潟・猫山                  茨城・女方15・22                  栃木・上仙波2                  栃木・上仙波                  群馬・注連引原D1b                  群馬・鷹の巢A                  長野・ほうろく屋敷C2</p> <p>3期 新潟・大曲3                  新潟・大曲4                  新潟・大曲4                  新潟・大曲5                  茨城・女方27・40                  埼玉・上敷免</p>	<p>1期 山形・石田1-1                  2期 福島・宮崎A1?                  3期 福島・南御山                  福島・五百地(表採)                  福島・乙字滝                  福島・滝ノ森                  福島・宮崎P7                  福島・宮崎P8-11                  福島・宮崎P15-18                  茨城・女方7-44                  茨城・女方8-49-50                  茨城・女方9-52                  茨城・女方10-58                  茨城・女方11-63-65                  茨城・女方14-76-78                  茨城・女方19-107-113                  茨城・女方20-118                  茨城・女方25-163                  茨城・女方29-180                  栃木・出流原1-1                  栃木・出流原2-1?                  栃木・出流原4-?                  栃木・出流原6-?                  栃木・出流原9-1?                  栃木・出流原10-1?                  栃木・出流原11-1                  栃木・出流原11-8                  栃木・出流原12-1?                  栃木・出流原16-1                  栃木・出流原23-3                  栃木・出流原31-3?</p>	<p>3期 栃木・出流原33-?                  栃木・出流原36-1?                  栃木・出流原37-?                  埼玉・横間栗2                  埼玉・横間栗8-1                  埼玉・横間栗8                  埼玉・上敷免                  埼玉・飯塚南1-1・2                  埼玉・宿下?                  埼玉・宿下(上と同一土坑)</p> <p>勾玉</p> <p>2期 福島・宮崎                  ? 栃木・柴4                  ? 埼玉・四十坂                  3期 埼玉・飯塚南1-1・2</p> <p>白玉・小玉</p> <p>1期 茨城・殿内6                  2期 栃木・柴工業団地4-2</p> <p>石鏃</p> <p>1期 福島・墓料11-10                  新潟・村尻91?                  新潟・村尻92?                  ●埼玉・横間栗1-1                  2期 栃木・柴工業団地2                  栃木・柴工業団地3                  3期 栃木・出流原24                  栃木・出流原36-1</p>
--	--	--

●=骨が棺内で共伴したもの。ゴチック=副葬品が棺内出土。1-1は1号土坑1号棺出土を意味する。

文時代の伝統を受け継いでいるが、3期に東北地方や関東地方東北部を中心として急速に普及した管玉の大多数は、並行する側面をもつ朝鮮半島起源の管玉である(図7-3・4)。勾玉も朝鮮半島系譜の半環型が埼玉県四十坂遺跡、飯塚南遺跡[荒川1988]、福島県宮崎遺跡[周東ほか1978]にみられる(図7-5, 図8-2・3)。縄文時代の装身具では管玉のほかに勾玉もかなりの比率で伴ったのに対し、勾玉が出土する再葬墓はわずか4例にとどまる。これは弥生時代にいたって西日本の影響のもとに再編成された玉の流通が、2~3期に東北、関東地方に及んだこと

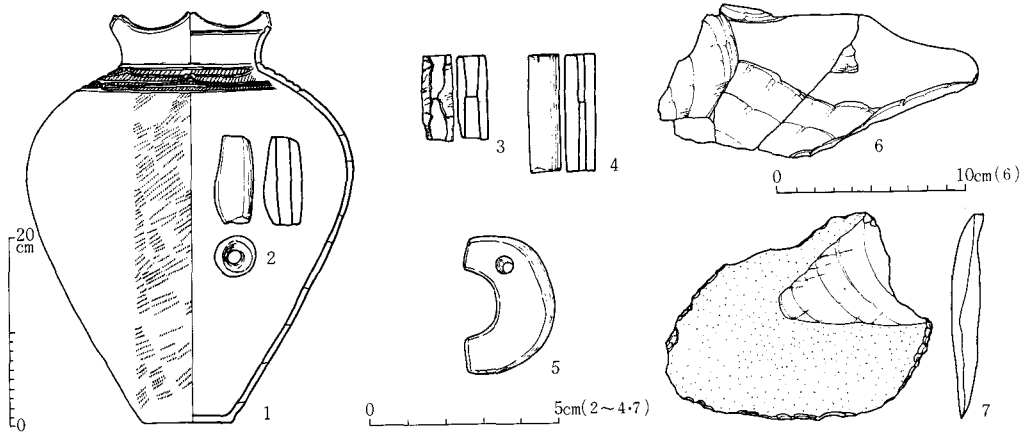


図7 壺棺再葬墓の副葬品 (1・2:山形石田A, 3・4:栃木・出流原, 5:福島・宮崎, 6:群馬・沖Ⅱ, 7:群馬・注連引原)

を示しているが、それは装身具のヒエラルヒーの体系にかなりの規制力をともなって流入したものと考える。

石鏃はわずかであるが、1期から3期を通じてみられる。福島県墓料遺跡の柳葉形の石鏃は、北海道方面の縄文晩期終末にみられる石鏃の土坑への副葬が影響を与えた可能性も考えてみる必要があるかもしれない。剝片の副葬とともに注目される。

剝片(図7-6)も管玉とともに破碎されたものを副葬する場合が多い[小柳 1979]。こうした損壊行為の背景は何か。原始、古代以来、勾玉はその鉤状の形態などから呪力があるとされてきた[三島 1973, 春成 1985など]。ならばそれとセットをなし、しばしば同じ石材でつくった管玉も当然呪力をもつものと信じられたに違いない。これがまともな形のまま葬られたのでは、それらに死霊、悪霊が取りつき復活して悪作用を及ぼす。死者に持たせてやるにはそれを恐れて損壊する必要があったのであろう。これは、遺体や遺骨に死霊が再生迷奔して復活することを恐れてお

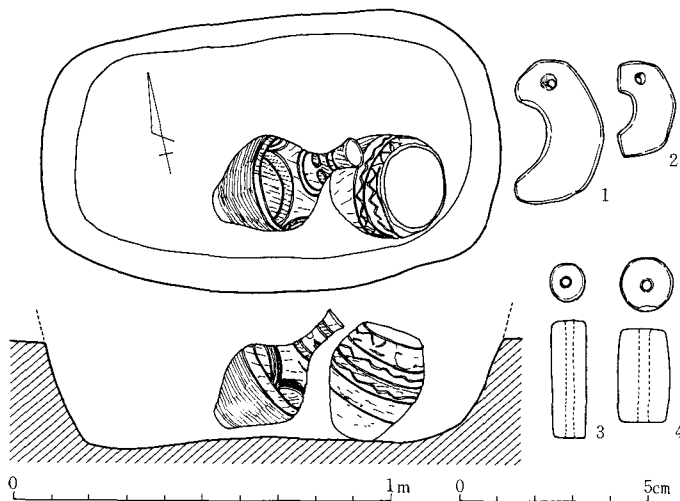


図8 埼玉県飯塚南遺跡1号土坑

こなった再葬の残余骨の徹底的な破碎や焼人骨葬[設楽 1993],あるいは剝片の損壊とも一脈を通じるものであろう。

さて、こうした副葬品が土器棺のなかで人骨と共存するのは横間栗で石鏃があるほかは、1期の剝片石器が4例みられるにすぎない。とくに管玉やその他の玉類は1例も共存する例がない(表4)。この



ことは、はたして復棺再葬墓の土器がすべて蔵骨器であったのか〔飯島ほか 1987〕、という問題に対する解答を用意しているかにみえる。埼玉県飯塚南遺跡は3b期であり、1号の長方形の土坑には壺が2個体偏在している（図8）が、これは壺棺再葬墓として理解されている〔荒川 1988〕。この時期、埼玉県などでは方形周溝墓を受容し、また福島県では壺棺再葬墓が単葬の土坑墓にとって替わった。飯塚南の土坑もその形態や土器の位置関係から単葬の可能性が考えられる。この想定が正しければ、2個の土器のいずれから勾玉と管玉が出土しているので、この場合は副葬品を納めたものと理解したほうがよいことになる。また、根古屋遺跡の人骨はいずれも焼けており、それを土器に納めているので人骨の遺存状態は他のものに比べてよいと推察できるが、すべての土器に人骨を納めたとすれば一つの土坑のなかでの複数の土器棺に人骨の有無の差が大きいことに疑問が生じる。したがって、復棺再葬墓のすべての土器が蔵骨器であったとすることには慎重にならざるをえない。

福島県窪田遺跡のSKC1から出土した壺にはトチの実20個を納めており、長野県篠ノ井遺跡群鉄塔地点の壺棺には人骨のほかに炭化果皮が混じっていた。群馬県上人見遺跡〔梅沢 1986〕の壺や注連引原Ⅱ遺跡〔大工原ほか 1988〕の壺棺再葬墓の土坑内には穂摘具と考えられる剥片石器を納めていた（図7-7）。有機質のものも含んだ食糧にかかわる副葬品を納める場合があり、そうした副葬品だけを納めた土器の供献の可能性も考えておく必要があるだろう。土器に充満した土の花粉分析やプラント・オパール分析データの蓄積が望まれる。

## 4 再葬の原理

### （1）復棺再葬墓の形成過程

**分析の視点** 復棺再葬墓の場合、複数土器が1体か複数遺体を納めたものか検討し、1体とは限らないことを推測した。したがって、再葬の原理を考えるうえで問題にしなくてはならないのは、一つの土坑のなかに複数の土器が納められるにいたる過程と、複数の土器棺に納められたもの同士の紐帯である。複数土器の埋納過程についてはいくつかの分析視角が提示されている〔石川 1989a など〕。それを参考にするとまず、(1)土器の型式学的な検討により、それらの間に時期差、時間差があるかないか検討することである。次に、(2)埋納にいたるまでに土器がどのような状況に置かれていたか、土器の状態を観察することである。そして、(3)土坑における土器の埋納状態を観察することで、納棺の過程を復元することである。(1)～(3)は、複数棺が集積を経ずに一括埋納される、すなわち複数遺体の遺骨処理の段階がほぼ同時である（ケース⑬・⑭と⑯と⑰・⑱がほぼ同時）のか、納骨の時期が異なる土器棺の集積を経て一括埋納される（ケース⑲などから⑳への移行期間中におこなわれるケース㉑に、複数の土器棺の集積に要した時間幅を想定する）のか、追葬によって複数棺埋納が完成する（ケース㉒）のか知るてがかりになる。

**土器の型式** 一つの土坑に埋納される土器のあいだに型式差があれば、土器そのものの伝世

は考えがたいので、最終的な再葬までに骨を納めた土器棺がどこかに置かれていたことになる。そのことに早く注目したのは須藤隆である〔須藤 1979〕。須藤がこのとき注意した土器は福島県鳥内遺跡のS 2号土坑と女方遺跡34号土坑であった。鳥内例は1 a期の土器と2期の土器が伴うとされるが、写真で判断するかぎり、2期の土器は1 a期の土器のかなり上方から出土しており、共伴関係にあるか否か疑問である。また、女方34号土坑の変形工字文土器と共伴したはずの壺形土器は実態が不明で、これも型式差のあるものの共伴とは断じがたい。つまり、須藤のこの時点での指摘はいずれも不確かなものであった。さらに、福島県墓料遺跡の調査によって一土坑の中における土器の型式差を強調している〔須藤ほか 1984〕。具体的な資料にもとづいた論議はされていないので推測するしかないが、8号墓坑の土器に型式差があると考えているようである。しかし、これらは1 a期の幅の中に収まるので、おそらく変形工字文の地域差に対する配慮を欠いたための結論ではないかと私考する〔設楽 1991〕。

石川日出志は一つの土坑の複数の棺に型式学的に先後関係にあるものが入り混じり、とくにそれは再葬墓の後半である3期に顕著であるとした〔石川 1983〕。具体的には千葉県天神前遺跡の第2号土坑の型式学的にやや新しい甕形土器が土坑のまんなかにも追葬されたように納められている例を示しているにすぎないが〔石川 1989 a〕、栃木県出流原遺跡の第11号土坑の第7例土器(図9-4)なども念頭においてのことと思われる。根古屋遺跡では第8墓坑の第5例土器(図1-8)は、確かに他のものより古い、大洞A式的な様相を示す。しかしそうした例は根古屋ではむしろまれで、一つの土坑の土器は文様要素などには新古相が混じりあうものもあるが、概して時期的なまとまりを示すことはすでに述べたところである〔設楽 1991〕。また、同じ8号墓坑ではどうしても新しい型式の1 b期(新)段階の鉢形土器を蓋にしているものが存在している(図1-3)が、後におこなう土器の埋納状態の検討によると、土器棺本体と蓋は区別して考える余地のあることがわかる。このように、明らかに形式的に先後関係にあるものが共伴する例はあるが、それはごくまれにみられるにすぎないのではないだろうか。さらに、墓坑内の一括資料をどうとらえるか、という認識の問題も<sup>(13)</sup>ある。

ただし、土器型式に差がみられなくとも、ある程度長期にわたる土器棺の集積を否定する材料にはならない。骨の集積を経て一括埋葬を待つ者が、たとえば血縁関係にあるものや同世代のものであると仮定すれば、死亡時期が数年の差になることも十分ありうるからで、その間、土器型式がほとんど変化しない場合が多いと考えられるからである。土器型式の変化のスピードをどれくらいに見積もるかによっても結論はやや異なるものとなるであろう。本来ならば、新古が混じりあうとされる例を拾いあげて吟味し、また一括資料の認識に対しても議論をすべきだろうが、ここでは複数埋納のものには明らかに時間的な型式差と見られるものもあるが、型式を異にするほど長期にわたる複数土器棺の集積はむしろまれであるとだけ予測しておく。

**土器の状態** たとえば村尻遺跡では34個体の土器棺が検出されているが、そのうち12個体に補修孔と思われる穿孔や、ひび割れに漆を塗って補修しているのが観察されるという。石川は日

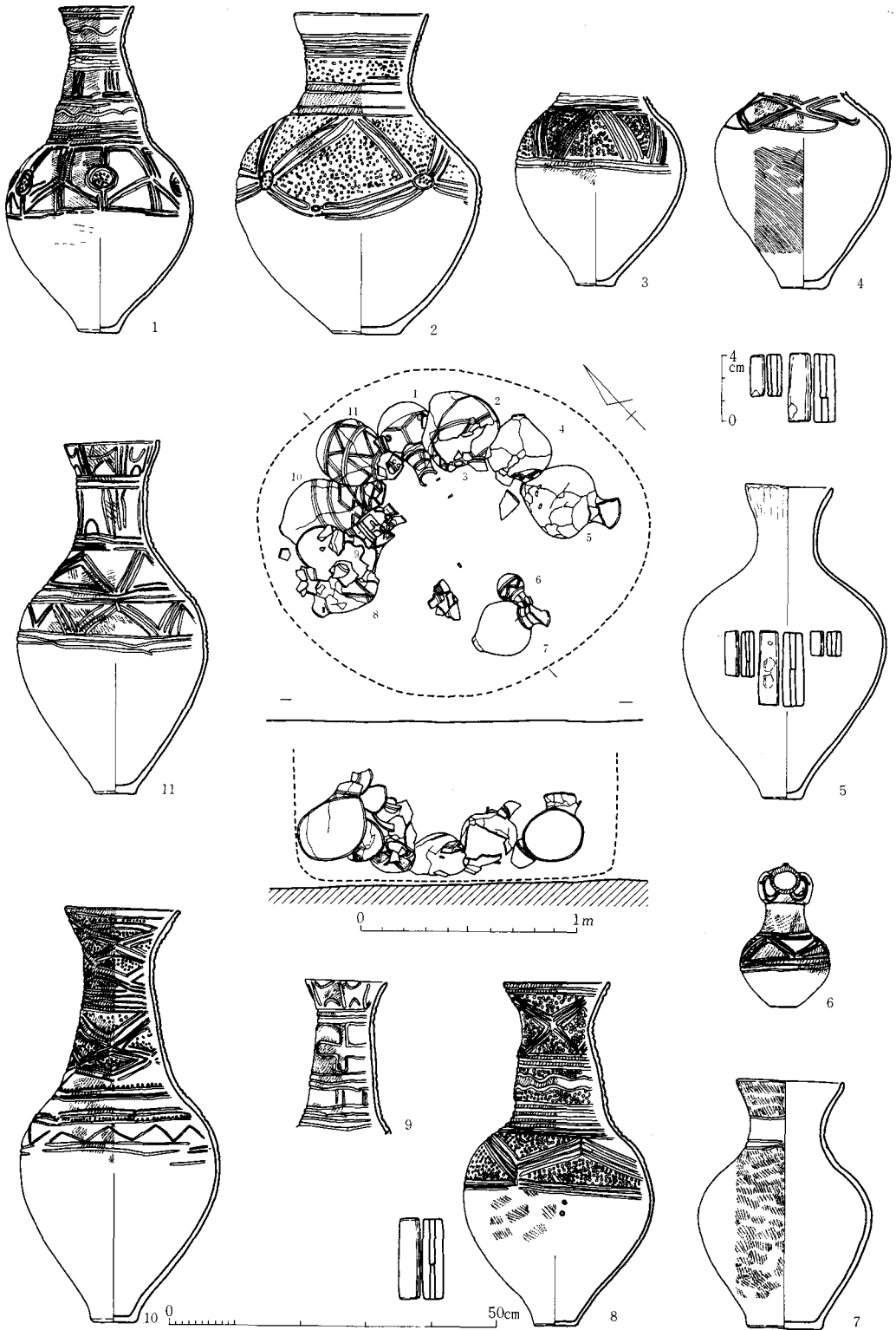


図9 栃木県出流原遺跡第11号墓坑

常容器から割れた補修土器を集めたかのような状態と表現し、再葬墓の壺棺だからこそ補修の比率が高いと考える〔石川 1989 a〕。複棺再葬墓に一括埋納されるまでに、かなりの時間を要した証拠とみなすわけである。

再葬墓の土器の補修孔や補修状況は、再葬墓とほぼ同時期同地域の日常的な遺跡での出現率と比較検討する必要がある。そうした検討に耐えうる遺跡は数少ないが、沖Ⅱ遺跡では、再葬墓出土土器は包含層の土器ともども補修率はいたって低い。これは沖Ⅱの再葬墓が単棺型が多いことにも起因するものとも思われる。その一方埼玉県池上・小敷田遺跡〔中島ほか 1984, 吉田ほか 1991〕の溝や住居址出土土器（3 b期直後）を観察すると、破損率が高いと思われる細頸壺などもほぼ同時期の3期の再葬墓の土器ほどに補修率が高くない。細かな検討は経ていないが、女方遺跡など3期の細頸壺が盛行する時期になると、再葬墓の土器の補修率も高まるように見受けられる。補修孔の過多やその比率の高まりには、遺跡の性格や時期的な傾向も作用していたのであろう。

村尻遺跡12号土坑のいわゆるヒト型土器（図4—1）は、口縁と両腕が欠けて磨滅し、ウエスト部に補修孔がある。そうした状態を石川は、ウエスト部が破損するような状況に欠損部が磨滅するような長期にわたって置かれていた結果だとみる。再葬墓の土器には器表面が磨耗したものがしばしばみられる。根古屋の土器を観察したところによれば、たとえば8号墓のとくに型式学的に古い例（図1—8）は磨耗の状態が他の土器にくらべてやや顕著である。ほかに器表面が磨滅しているものが多いが、これらの磨滅が火熱によることも十分考えられる。再葬墓の土器は壺形土器でも火熱を受けているものがしばしば認められ〔佐藤 1985〕、それには深鉢のように内面に煮沸の痕跡がないものも多く、葬制にかかわる祭儀に用いられたことが可能性として考えられている。たしかに再葬墓の土器には補修痕や磨耗の状態から、日常の使用とは異なったより長期におよぶ使用が想定されるものもあるが、使用痕や磨耗の要因に関してはより確かな観察と分析方法を確立する必要がある<sup>(14)</sup>。

**土器の埋置状況** 意識的な再葬墓の発掘調査が少ないなかで、村尻、新潟県大曲〔石川 1989 b〕、墓料、沖Ⅱ遺跡などで土器の埋置状況の詳細な観察をおこなっている。これらの観察によると、村尻や大曲遺跡では土坑の底は比較的平らで土器の底部のレベルがそろっているものが多く、レベルを異にするものでも肩を接するものが多い（図10）。墓料でも肩を接して複数の棺をぎっしりと納めたものがあり、これは複数土器の一括埋納の証拠であるとする。小野天神前遺跡の16号土坑は十数個の土器がみな同一方向に重なり合って傾斜しており、阿久津久は、一括埋納して埋め戻す際に傾いたと推測している〔阿久津 1979・80〕。また、壺棺再葬墓には土坑を掘り返した痕跡のあるものは、まだ報告されていないのではあるまいか。村尻、墓料遺跡ともに土坑埋土の観察から、土器を埋納した時に一気に埋め戻したとされる。こうしたことから、いったん埋葬した土坑を掘りかえして追葬することに対しては否定的材料を指摘することができる。

しかし出流原遺跡第11号墓坑（図9）は土坑の壁にそって古い土器棺から逐次置いていき、最後に顔面付土器を埋設したという、オープン状態での土坑への追葬を想定する向きもある<sup>(15)</sup>。この

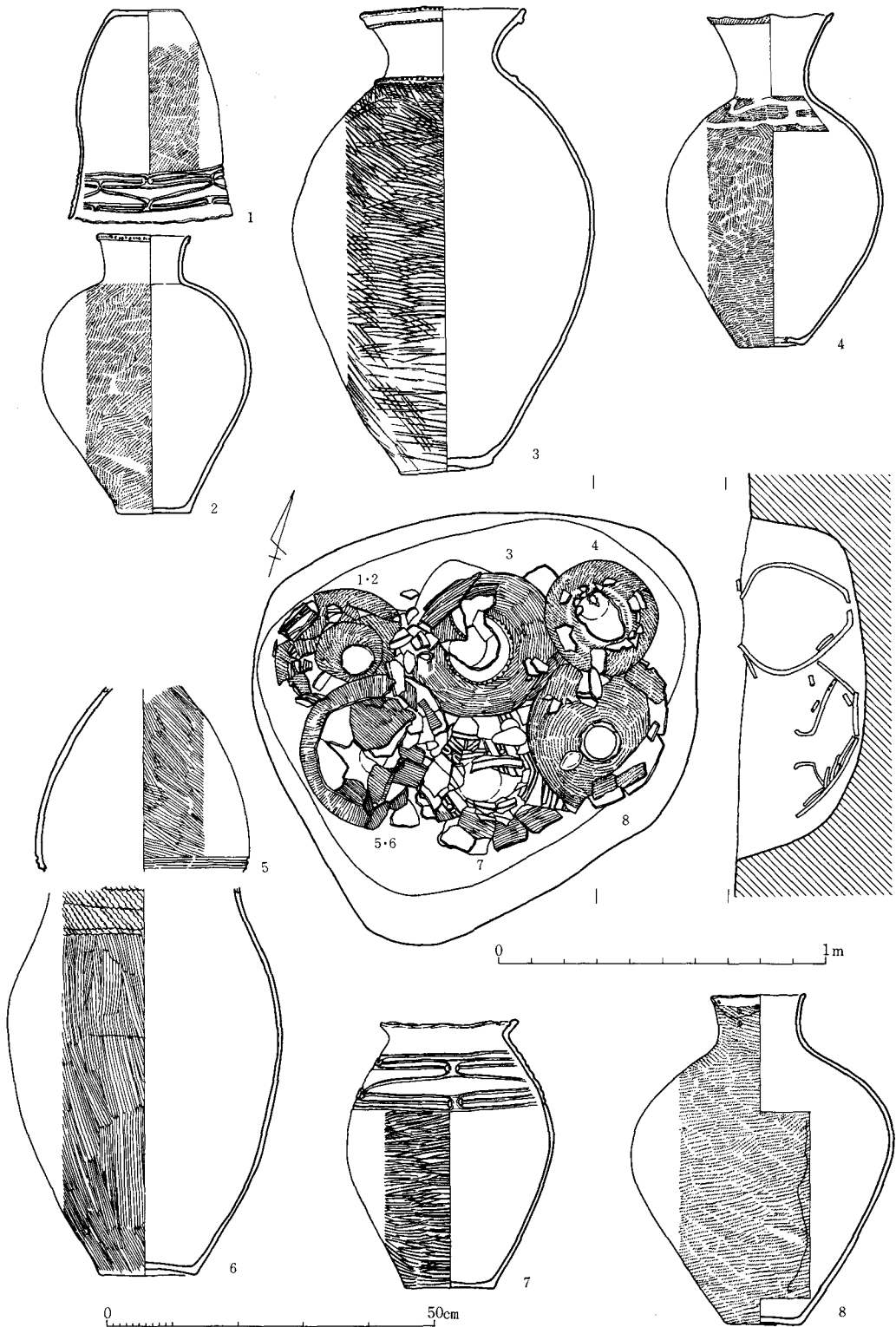


図10 新潟県村尻遺跡91号土坑

土坑は土器によって囲まれた中央部分に空間があり、同じような土器の配列状況と空間をもつものには横間栗遺跡2号再葬墓，出流原遺跡第31号墓坑，天神前遺跡第2号墓坑などに類例がある。追葬によって埋められるべき空間が何らかの原因でそのままの状態では埋め戻されたと考えることもできようが、有機質のものが納められていた可能性もある。出流原11号墓坑は中央に壺と顔面付土器を埋置するが、骨が出土したのは12個体の壺のうち、中央の1個体を含む2個体だけからである。さらに回りに配列された壺のいくつかからは管玉が出土しており、先の予測からすればすべてではないにしても、蔵骨器でないものを含む可能性がある。土坑内の空間も含めて、いったい現在に至るまでに失われてしまった情報はどれだけあるのか考えると、再葬土坑は現在知られるよりはるかに多様性をもった空間だったと考える必要があるかもしれない。

すでに述べたように根古屋の第8墓坑は2型式の差がある蓋がかぶせられていた。ほかにも第6墓坑は1b期(古)段階の土器のみによって構成されるが、土坑上方に2期の鉢形土器が伴ったとされる。第22墓坑は1a期の土器を主体とする再葬墓であるが、2期の鉢形土器がこれも土坑上方に伴うとされる。これはどのように理解すればよいのだろうか。考えられる一つは、鳥内のS2号例も含めて、2期の再葬墓が偶然1期の再葬墓と重なって築かれ、攪乱などによって破壊されてあたかも下の土坑に伴うような状態で検出されたという解釈である。もう一つはこれが本来的でありかたで、追葬ないしは供献を考えることである。村尻遺跡第91号土坑には、土坑を埋めたのち、土器棺の口縁が破損してこぼれたものがあるが、それが土器の口縁よりもかなり低いレベルの位置で検出されている(図10)。同様な例は、沖II遺跡でもAU-13などにみられる。また、再葬墓の土坑は密集するにもかかわらず、互いに切り合わないものが多い。こうしたことから、荒巻実や石川は土坑が埋め戻されても、土器の一部が地表に露出していた場合もあったとしている[荒巻ほか1986, 石川1987]。このことは、土器棺本体はその埋納状況からして追葬は考えにくい、それとは別に土坑をあまり掘らずして供献や追葬することが可能なことを示している。

それでは根古屋遺跡第8墓坑はどうか。第2の解釈を導入すれば、1b期まで露出していた土器棺に新たな蓋をした、と苦肉の策を講じることもできよう。しかし、墓域形成過程はそのことに否定的なありかたを示す。つまり、根古屋の埋葬区画のうちの2a群も2b群も3a群も、墓坑が内側から外側に向かって順次築かれていっているので、2b群のもっとも外側に位置する第8墓坑は、この群でももっとも新しいものとみなすべきだからである(図13)。土器棺本体に1b期まで下るものがないので、集積の後に1b期に埋納された契機を示す積極的な根拠もないが、1点大洞A式的なひとときわ古く、根古屋でも特異な2号棺の存在は集積が長期にわたったことを考えるてがかりにならないだろうか。

したがって複棺再葬墓の土器棺は、土器の表面観察などからしてある期間の集積を経て一括埋納されたものであり、その期間はまれに型式を隔てた長期にわたった場合があるが、共存の土器型式からみて多くはさほど長くなかったと結論することができる。つまり⑮ないし⑰から⑲を経て⑳・㉑にいたる過程をとるが、㉑の期間の時間幅は土器に型式差が明瞭に表れるほどのもので

はなかったであろう<sup>(16)</sup>。そして多くの土器棺は一括で埋置され、一気に埋め戻されたものとみる。ただし、埋納にあたっては土器棺全部がかくれるような埋納がされなかった場合もあり、追葬や供献などの行為がおこなわれた場合もあった。これらのことは複棺が複数遺体の集合である可能性を推測させる。蔵骨器の集積の背景として、一括埋納を待った何らかの集団の存在を考えさせるのである。

## (2) 墓域の構成

**埋葬小群** 墓地における数体～10数体からなる埋葬の小単位は、「埋葬区」[林 1977]あるいは「埋葬小群」[春成 1980]と呼ばれる。林謙作は「墓域」に対して、それがたんに埋葬の集合ではなく、なんらかの原理にもとづいて群別されたグループ、すなわち埋葬小群の集合であるとの確にとらえた[林 1977・1980]。こうした見方からすると、はたして再葬墓には墓域なるものが存在したのか、またそれは縄文時代とどのような関係をもつのが問題になる。そこでまず縄文時代の墓域を、群別の指標となる埋葬小群と墓域構成形態の点からみておきたい。

水野正好は縄文後期初頭の秋田県大湯環状列石(図11)を分析し、いくつかの配石=墓の集塊が互いに間隔を保ちながら環状に連なることで墓域を形成していることを明らかにした[水野 1968]。岩手県西田遺跡は縄文中期中葉の集落であるが、すでにこの時期の環状の墓地がいくつかの埋葬小群からなることがわかっている[春成 1983]。それでは、こうした埋葬小群の意味はどのように考えられているのだろうか。水野は大湯環状列石と縄文中～後期の集落の分析から、環状列石の埋葬小群は2個一組になっており、それが集落の2棟一対の竪穴住居の基本的な構造と対応することを主張した。林は大湯の環状列石と北海道柏木B遺跡の環状周堤墓の分析から、埋葬小群の占地主体が世帯であると推定し[林 1979]、

春成も埋葬小群が身内のグループと婚入者のグループからなり、それらは集落内の特定の場所に何世代にもわたって立て直された一棟の竪穴住居=一世帯の歴史の一部に対応するという[春成 1980]。すなわち埋葬小群は出自関係により区別されたグループからなる、累積した世帯<sup>(17)</sup>の墓群であると考えたのである。西田や大湯の墓域は環状を呈する。春成は縄文時代の典型的な埋葬の多く、あるいは弥生時代の初期のものいくつかは環状をなすことを明らかにしている[春成 1979]。

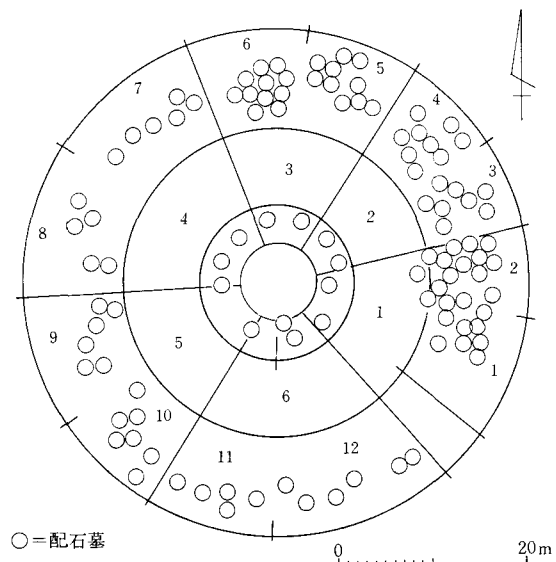


図11 秋田県大湯万座環状列石

**壺棺再葬墓の墓域構成** 壺棺再葬墓の

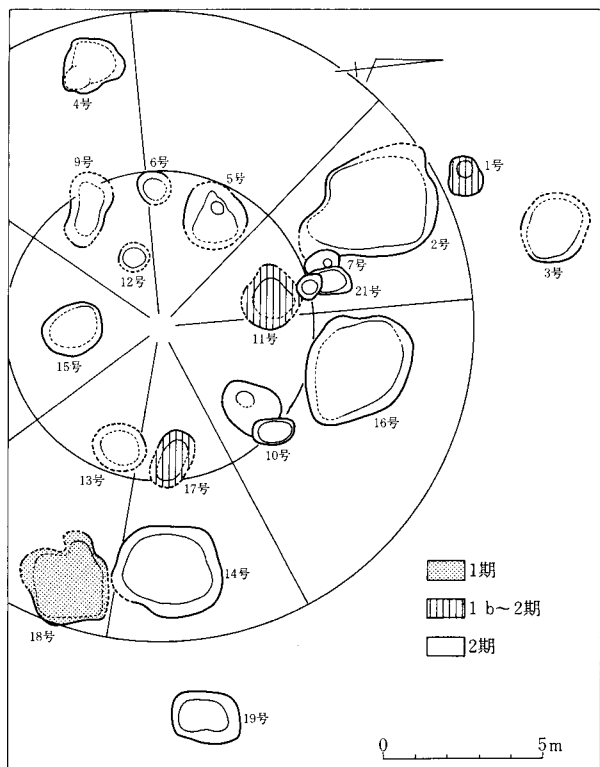


図12 茨城県小野天神前遺跡

墓地全体が調査された例は多くないが、1から数基が小さくかたまったり散在したりする墓地と、数十基が群在する大規模な墓地の二形態あることがすでに指摘されている〔杉原ほか 1969, 星田 1976, 林原 1985〕。こうした違いは林原のいうように必ずしも地域的な相違ではなく、地域のなかでの集団のありかたに違いの要因があるのだらう。<sup>(18)</sup>こうした差は母集団の追究が必要であるが、居住域がほとんど不明な現在ではなほだ困難なことであり棚上げして、ここでは比較的規模の大きな墓地に検討を加えることとする。福島県根古屋(1 a ~ 1 b 期), 新潟県村尻(1 b ~ 2 期), 茨城県女方(1 b ~ 3 a 期), 小野天神前(1 b ~ 2 期), 栃木県出流原(3 a 新 ~ 3 b 期), 群馬県沖 II(1 b ~ 2 期)

などが検討に耐える資料を提供している。根古屋をはじめとするこれらいくつかの墓地では、墓地が環状ないしは弧状を呈するとされるものがある。そのうち根古屋と出流原について土坑の変遷を追いながら、その墓地の歴史をたどってみることにする。一方、墓地全体が環状構成をとらないものとして、沖 II, 女方をとりあげる。これら比較的規模の大きい再葬墓が数群の土坑のまとまりによって成り立っていることを指摘したのは星田享二であり〔星田 1976〕, 墓地構成原理を明らかにするための作業として重要な視点である。

小野天神前遺跡(図12)の墓域が内帯と外帯からなることは、川崎純徳、鴨志田篤二が指摘している〔川崎ほか 1980〕が、出土土器の内外での相関関係はないとする。石川日出志も二重の環状配列に注意をうながし、外帯に大形墓坑と顔面付土器が配置されることを指摘する〔石川 1989 a〕。これらは2期の土坑が大半であるが、18号土坑が1 a 期ないし1 b 期にさかのぼるほか、1・11・17号土坑が相対的に古く、1 b 期(新)段階もしくはそれに近い年代が与えられる。これら時期の古いものは内帯外帯ともあるので、内帯と外帯は先後関係ではないが、13号と18号、17号と14号、10号と16号、11ないし12号と2号、9号と4号が対応関係にあるようにもみえる。そうであれば内帯と外帯の墓坑はなんらかの関係をもって成立したものであり、秋田県大湯の万座環状列石の構成(図11)と通じるものがあることを、ここでは確認しておくにとどめたい。

筆者は別稿で根古屋遺跡(図13)の壺棺再葬墓出土土器の分析をおこない、大きく第1群と第



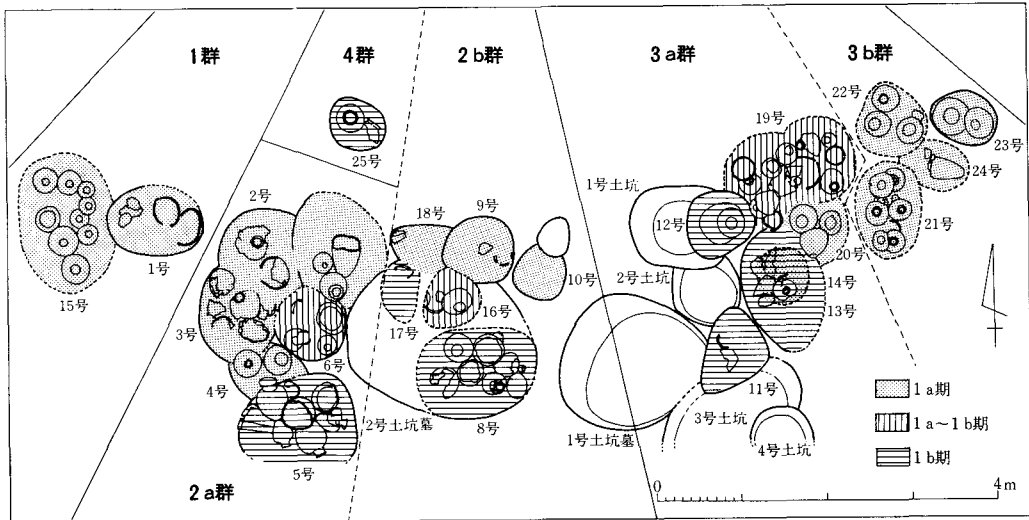


図13 福島県根古屋遺跡

2群の2期にわたった〔設案 1991〕。本稿の時期区分に対応させれば、第1群(古)が1 a期で、第1群(新)と第2群が1 b期である。1 a期だけの純粋な墓坑が多いが、第1群の新古の土器が入り混じるものや、第1群でも新しい1 b期(古)段階に属する墓坑もある。こうした点に留意して、根古屋の25基の再葬墓を1 a期単純と、1 a～1 b期(古)段階、1 b期(新)段階の3期に分けると、1～4・7・9・10・14・15・18・20→6・16・19→5・8・11～13・17・25墓坑となり、加えて6・22墓坑の追葬ないし供献(?)という変遷がたどれる。<sup>(19)</sup> 根古屋の墓地は互いに重複する墓坑がわずかな空間を隔てて4群に分かれ、さらに2群が2つにグルーピングできる。西から、1群=1・15号墓坑、2 a群=2～7号墓坑、2 b群=8～10・16～18号墓坑、3 a群=11～14・19・20号墓坑、3 b群=21～24号墓坑であり、それらが弧状に連なり、弧からやや離れた内側に4群である25号墓坑がある。東と西の墓域の広がりには明らかでないが、南北にはこれ以上広がらないようである。各群の墓坑は互いに重複しており、墓坑の時期区分をみると各小群それぞれに古いものから新しいものまで認められる。つまり各小群が同時進行で累積的に形成されたことを示しており、各群は埋葬小群とみなせる。これら埋葬小群の個々の出土遺体の総数は1群=6体、2 a群=10体、2 b群=14体、3 a群=12体、3 c群=2体である。これがそのまま再葬人骨の数を示すとはとうてい考えられないが、ある程度の傾向を知ることはできよう。

出流原遺跡(図14)からは3 a期から3 b期にわたる再葬墓が37基検出されており、これらは2～10基が一つのグループをなして弧状に並ぶとされている〔春成 1986〕。そうしたグループを北から1～8群とする。各群のなかには、厳密性に欠けるものの2個一対のまとまりが認められる。完形の土器を出土した31基をみると、3 a期の新しい段階と3 b期のものからなるが、3 b期のものにも3 a期に近い古い要素をもつものと、数本の波状沈線文を特徴とする新しい要素をもつものがある。3 a期、3 b期(古)、3 b期(新)としておくと、それぞれの中間的な帰属を決めが

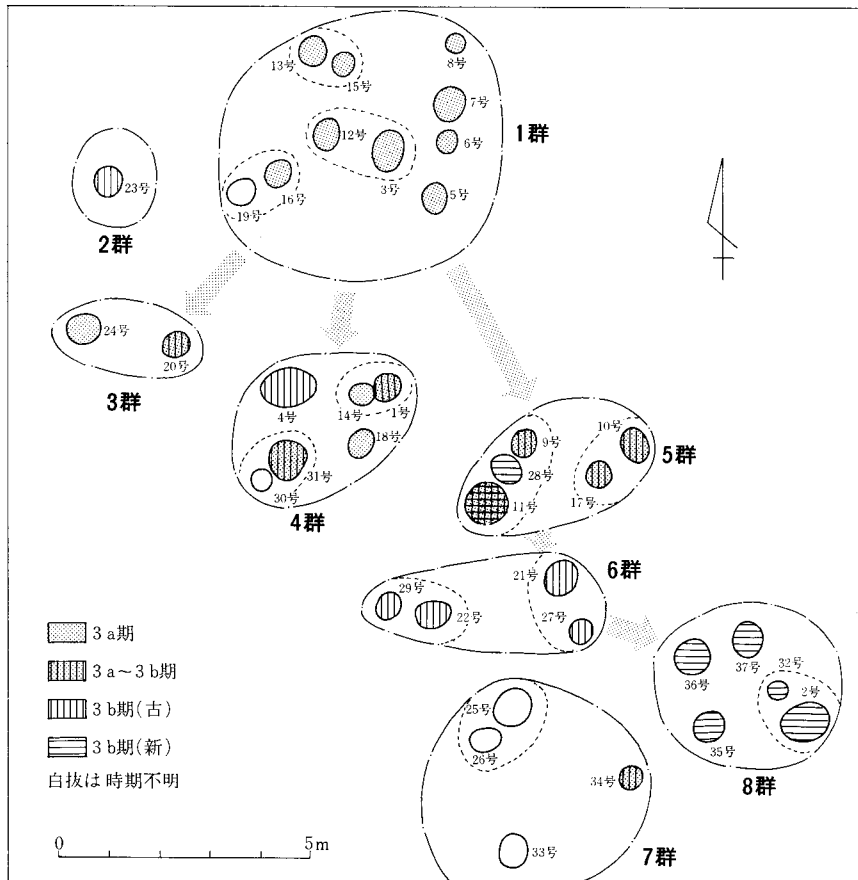


図14 栃木県出流原遺跡

たいものもあるが、1群は3 a期=3・6・7・8・12・13・15・16号土坑、2群は3 b期(古)、3群は3 a期=24号土坑、3 a~3 b期=20号土坑、4群は3 a期=14号土坑、3 a~3 b期=1・31号土坑、3 b期=4号土坑、5群は3 a~3 b期=9・10・17号土坑、3 a期~3 b期(新)=11号土坑、3 b期(新)=28号土坑、6群は3 b期(古)=21・22・27・29号土坑、7群は3 a~3 b=34号土坑以外不明、8群は3 b期(新)=2・32・35~37号土坑となる。つまり、1群は3 a期によって構成され、それが3 a期に3~5群に分解しておおむね3 b期(古)段階まで継続し、さらに6群→8群という変遷をたどるように、西北から南東への埋葬区の移動形成をみてとることができる。これは根古屋遺跡のように、経年変化をたどって埋葬グループが同時進行で形成されたものではなく、一つ一つの埋葬グループは時間差で形成されていったものと考える。

沖II遺跡(図15)からは27基の壺棺再葬墓が検出されている。その多くは1 b期(新)段階であるが、これらも土坑の切り合いで前後関係が確認できるものがあり、型式学的にみて2期に近いものが5基(AU-4・5・14・15・23号)ある。2期のものが2基(AU-7・10号)ある。沖II遺跡の墓域は1群と2群に分かれ、さらにそれぞれ2, 4の小グループに分かれるとされる(1 a・1 b, 2 a~2 d群)。1群はa・b群に、2群はa・bとc・d群に二分されているよう

に見える。それぞれのグループに古いものから新しいものが存在しており、墓域があらかじめ分割されてそれぞれのグループを形成するような方向で墓が増えていったことがわかる。縄文時代の埋葬小群のありかたと変わるところはないが、墓域は環状ないし弧状にならず集塊状である。村尻遺跡は墓群が一つだが、沖IIと似た構造をとる。

女方遺跡(図16)は1期から3期におよぶ再葬墓で、41～43基の壺棺再葬墓が検出されている。一見漫然と分布するようにみえるこれらの墓坑も、時期別に区分するとおおむね北から南に移築されていったことは、発掘者である田中国男がすでに指摘している〔田中 1944〕。以下、墓域の構

成と変遷を検討するが、未発表資料が多くて一つの墓坑の時期を一個の土器で推し量らざるを得ないものもあり、時期が不明の土坑もあるため傾向性の指摘にとどまる。墓地全体は環状構成をとらないが、1・2期の墓はそれだけで半環状に構成される(1群)。22・34・36・38号堅穴および波号とされた土器群は1 aないし1 b期に属するもので、内側に半円形に並ぶ。2期に属する15・27・28・33・35号はその外側に半環状に並ぶようになる。このうちの27・35号にはすでに3期的な要素をもつものも含まれ、別の墓域への移行が準備される。3 a期になるところした半環状の構造は崩れ、9号、30号を皮切りに南半に塊状に集合する2群からなる構造となる(2・3群)。

以上、墓域構成のわかる代表的な例をみてきた。沖II遺跡には東海地方の初期弥生文化である条痕文土器文化の影響が強く認められることを考えれば、再葬墓という伝統的墓制をとりながらも、すでに2期の段階で根古屋など縄文文化の伝統とは違った動きを見せている。しかし、環状ないし弧状の墓地構成をとるものはそれ以前の縄文時代にも多いとはいえず、沖IIのようなあり

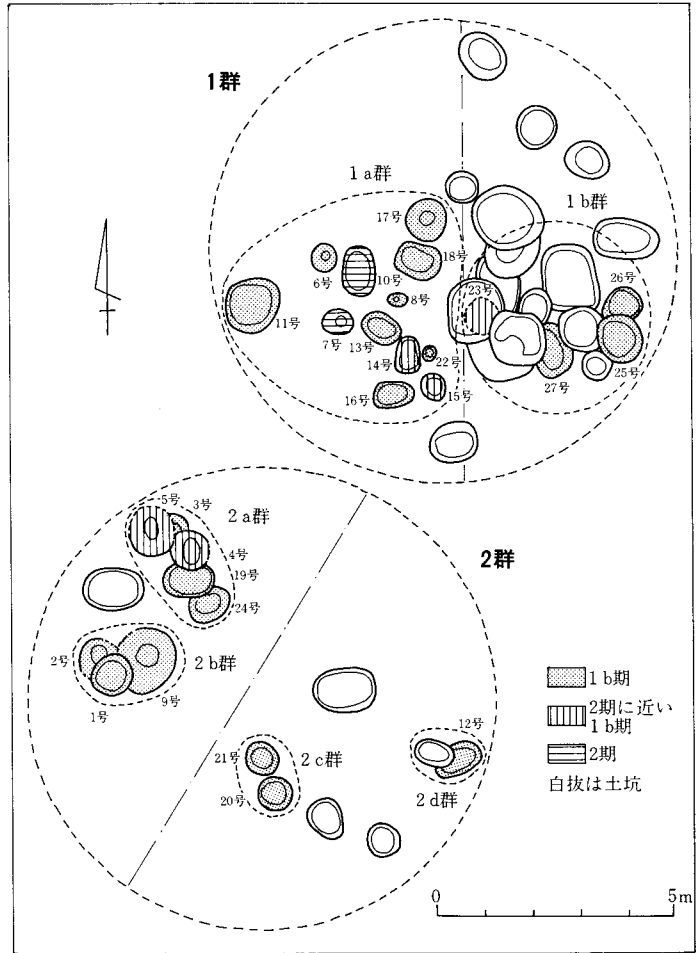


図15 群馬県沖II遺跡

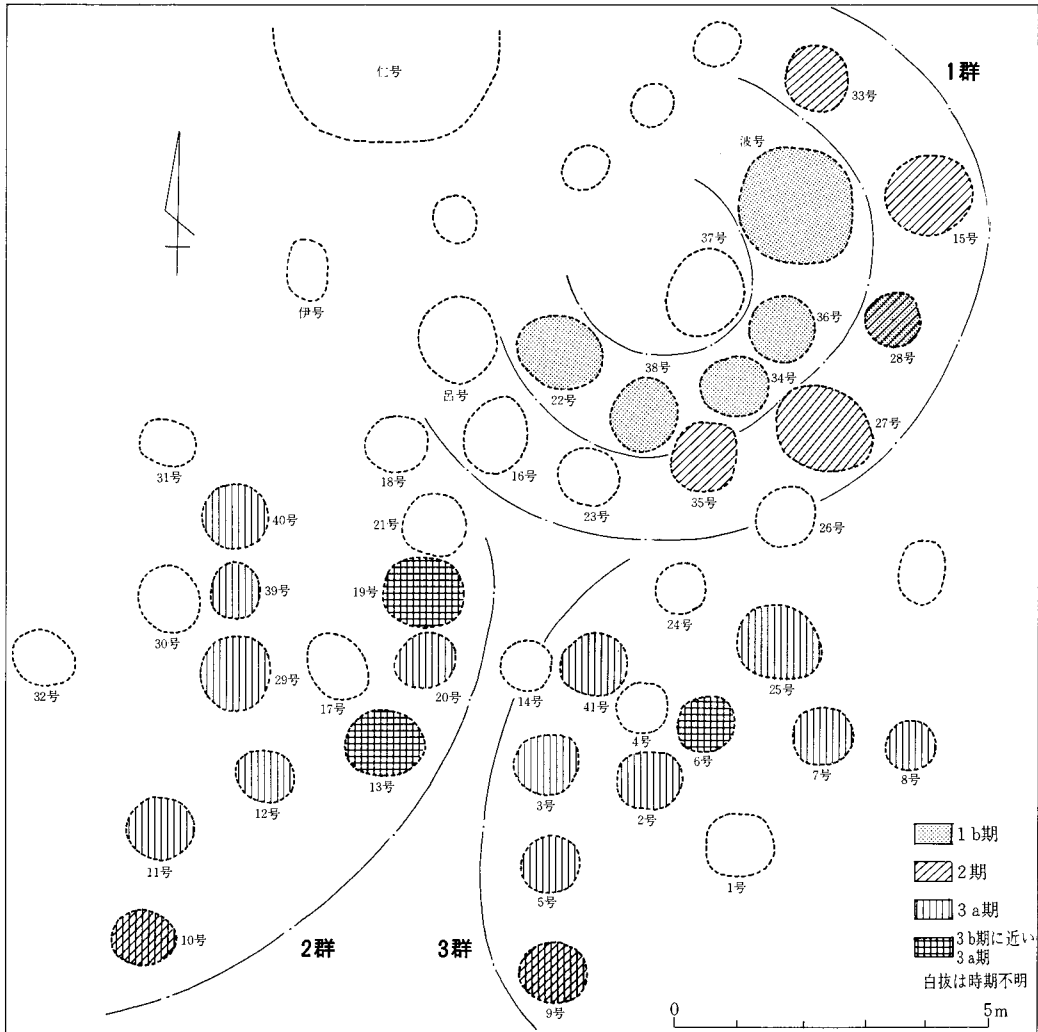


図16 茨城県女方遺跡

かたが一般的であろうことを思えば、塊状の墓域構成に外部からの影響をそれ程強調すべきではないのかもしれない。ただし、小野天神前や女方などは2期までは縄文時代の環状ないし弧状構造の伝統を引きながら、3 a期には沖Ⅱのパターンへと変化していることを見逃すわけにはいかない<sup>(21)</sup>。出流原遺跡の弧状をなす埋葬小群の集合のようにみえる墓地も、集塊状の埋葬区がつぎつぎに場所を移して形成されていった集合体であり、あらかじめ墓域を区分して埋葬していく埋葬小群とは本質的にやや異なったものである。弧状の配列というのも偶然の結果だと考える。いずれにしても環状、半環状ないし弧状配列をとるのは、再葬墓でも1・2期という古い段階に顕著な傾向だと指摘できそうである。そのことはまた、初期の再葬墓の墓域構成原理が縄文時代のそれを踏襲していた可能性が高いことを示しているのではないだろうか。

### (3) 再葬の原理

壺棺再葬墓の形成過程と墓域構成を分析してきた。再葬墓から骨がもっとも多く出土したのは根古屋遺跡である。それによれば、一つの土器のなかに複数遺体を納めたものも、一つの土坑のなかに複数遺体を納めたものもあった。しかし焼骨というやや特殊な状態のものであり、これが再葬一般の傾向として普遍化できるかが問題になる。一つの土器内の、あるいは一つの土坑内の複数土器における人骨のありかたは、東北、東海地方と関東地方では若干異なっていた。前者が一つの土器棺に複数納めたいわば合葬型式をとるものがあるのに対して、後者にはそれがない。これは関東地方では人骨を破砕したり焼いたりする儀礼と再葬がシステムティックに展開しており、土器に納める人骨は一部分に過ぎなかったという残存条件の悪さが作用しているため、と考えられる。また、関東地方にも土坑内の2個体の土器それぞれから別個体の人骨が出土した例があり、すくなくとも一つの土坑単位での合葬はあったといえる。したがって、根古屋のありかたはその保存の良さから、再葬墓地帯全域に普遍化できる可能性がある。そうした推測が許されるならば、一つの土坑に合葬された人々のつながりはなにか、さらにそれが集合した再葬墓地の構造はいかなるものだったのか、という問題が生じる。

壺棺再葬墓の土器には明らかに時間的な型式差をもつものもある。また、一土坑の土器が10数個体に及ぶものもあり、長期にわたって多くの人骨が集積された可能性を考えさせる。杉原荘介は、かつて一つの土坑の土器群を、「集落を構成するなかの小集団すなわち最少の家族単元を示すもの」とした。そして遺骨処理と複数棺の一括埋納の契機を家長などの死亡に求めた〔杉原1967〕。こうした考えの背景には1土器=1遺体の蔵骨器という図式が作用していたが、それは殿内遺跡の分骨を思わせる土器棺によって撤回されている〔杉原ほか1969〕し、すでに述べたように複数土器をすべて蔵骨器とみなすことも問題だから、烏内遺跡や小野天神前遺跡など12個あるいは14個に及ぶ一土坑の土器の遺体数も目減りして考えることができる。したがって、杉原説に立ったとしても累世的な追葬〔石川1987〕を考える必要はなくなる。しかし、一つの土坑を一つの世帯の墓とみなすならば、それが集合した埋葬小群はなにか、さらにそれを統合した墓域はどういうまとまりなのか、杉原説では答えることが困難なように思われる。

また、再葬は同世代の年齢集団のものだったという仮説〔馬目1984, 田中1991〕があるが、再葬墓の合葬には年齢は成人と小児の組み合わせが、性別では男女の組み合わせがあったので、出土人骨からみれば年齢階梯的な同世代異性集団の可能性は薄い。さらに、縄文時代の合葬原理〔春成1980〕が生きているとすれば、夫婦など出自を異にするものどうしの可能性は低いと考えるのが妥当である。このように考えてよければ、一つの土坑の複数遺体の骨は親子あるいは兄弟姉妹、イトコどうしといった、死亡時の時間差が土器の型式差を超えない程度の血縁関係の紐密さにもとづくものが多かったと思われる。

根古屋をはじめとするいくつかの再葬墓で、埋葬小群の存在とその形成過程、変化を明らかに

した。根古屋では1 a期にあらかじめ弧状に壺棺再葬墓が配列され、1 b期にそれと重複関係をもちながら壺棺再葬墓が次々につくられ、最終的にわずかな空間で区切られた6個の埋葬小群が形成されたことを復元した。再葬墓の個々の土坑に葬られたのは、1～4体、多い場合で7体の合葬を中心とした人骨であり、それらは縄文時代の合葬の遺体数〔春成 1980〕と矛盾しない。また、ひとつの埋葬小群に葬られた遺体数は十数体程度と考えられ、これも矛盾するものではない。沖Ⅱの埋葬小群は、その中が二分割されているようであり、出流原の一つの群の中の墓坑は2個一対になるものがある。憶測の域を出ないが、血縁と非血縁を区分したものかもしれない。

こうしたことから、再葬墓の初期に顕著な墓域の弧状配列と、群別された固定的な範囲に累積的に形成された埋葬小群は、縄文時代の墓域構成のありかたを踏襲していることを推測させる。一つの土坑における複数棺内の遺骨は、縄文時代の合葬と同じくなんらかの紐帯により合葬されたものであり、それが集合した埋葬小群が一つの世帯の累積した墓群を示し、墓域全体が一つの集落の歴史的な墓地であるとみたいのである。再葬墓の埋葬小群は、その形態だけでなく内容自体も血縁と非血縁を区分した差別原理と世帯原理を内包した縄文時代の埋葬原理〔春成 1988 b〕を踏襲している可能性が高いと推測する。しかし、そうしたありかたが想定できるのは、おもに3期以前の再葬墓であって、墓域構成に変化がみられる3期以降はその限りではない。西からの方形周溝墓の流入や東北地方からの土壙墓の影響が強まるこの時期、再葬制にも歴史的变化、変遷があったはずであり、それをあとづける作業は今後の課題である。

村尻や沖Ⅱ遺跡では、異なる土坑で出土した土器や剥片が接合する例(図8-6)を報告している。また、土坑どうしが重複する例が沖Ⅱや根古屋にみられ、そうした現象は血縁的な親縁関係を説明するものとされている。穿孔人歯骨の佩用にも同様の解釈が下されている〔宮崎ほか 1985〕。これらは血縁的なつながり、世帯の中でのつながり、世帯間の関係など多様な側面から検討すべき問題であるが、こうした関係性がいかなるものか、判断することはなはだ困難といわざるをえない。再葬墓出土人骨の歯冠計測値にもとづく血縁関係の推定やDNA分析など、条件に応じておこなう必要があるだろう。

## おわりに

再葬墓の研究は1981年の石川日出志らによる新潟県村尻遺跡の発掘調査を契機として、新たな局面を迎えた。遺跡における遺構の形成過程を通じ、遺跡、遺構、遺物から情報を可能なかぎり引き出そうという方向性の確立である。また、外山和夫、飯島義雄に生物学の宮崎重雄をまじえた共同研究も、個別実証の部分で大きな成果をあげており、よりインテンシブな研究が進められつつある。本稿はこうした成果にもとづいて論考を進めたが、さまざまな要因から結論のでない問題がいくつもあることが判明した。もはや紙数も尽き、今後の課題として提示することもできないが、それは石川による要を得た問題提起〔石川 1989 a〕に譲るとして、最後に再葬の原理につ

いて付言してまとめにかえたい。

筆者は壺棺再葬墓に縄文時代の墓域構成原理の伝統性を推察し、初期の再葬墓の一土坑の複数棺に納めた人骨を血縁関係にあるものと推定し、埋葬小群を累積する世帯の墓とみなした。しかし、そうした考えにも異論がないわけではない。村尻遺跡の第91号墓坑の土器（図10）には、西端の2個体がともに蓋付棺であり、まんなかの2個体が細密条痕を地文とするもの、東の2個体が縄文を地文とするもの、という系統ごとの組合せが認められるという〔石川 1987〕。このように、系統が近似した土器どうしの有意な配列には、一つの土坑に合葬された者の関係の反映という視点で分析することが要請される。土器の系統が被葬者の出自を示すものだという立場に立てば、外来系土器の墓坑内共存の多さから、筆者の理解とはまた別の考えも成り立ちうる。

すでに紹介したように、田中琢は再葬墓を年齢階梯集団の墓と説く〔田中 1991〕。田中は納骨土器に補修孔など修理したのがあることや、そこに磨滅痕をもつものがあることから、それらが長期にわたって保存されてきたことを推察する。そして、一つの土坑にはわずかながら古いものと新しいものが混在していることを重視する。そうした事実から、一つの土坑にそれぞれ別の人骨を入れた複数の納骨土器が納められているのは、長期にわたって土器に納骨しておき、最後に一度に土中に埋めた結果だ、と考えた。こうした墓制は、その背後に年齢によって組織された、年齢集団の存在を考えると理解しやすいとする。つまり、成人式などの一定の周期でおこなわれる儀式と一致して年齢集団が形成され、その集団構成員が一つ一つの土器棺に再葬され、その集団が死に絶えると土坑に一括埋納されるというのである。

年齢集団は男女別であることが基本で、田中自ら述べるように再葬墓では男女が一つの土坑に葬られた例がいくつかあり、これが弱点である。また、根古屋の土器棺には年齢が異なる個体が合葬されていることも矛盾した事例である。しかし、人骨の性別鑑定は小破片では困難が多いのも確かだろう。天神前の1号墓坑例は、成人女性か少年か、区別が困難とされ<sup>(22)</sup>、根古屋の第19墓坑と21墓坑の人骨は少年ないし女性と鑑定されており判断が難しいことを示している。また、土器棺の新古の混在をどの程度評価するのかが本稿でも問題にしたところである。が、これとてほぼ同じ世代に生きたものが死に絶えるのに要した時間は、余り大きく見積もる必要もないことになる。本稿では出土人骨の鑑定結果に即して、縄文墓制のありかたを背景に出自と世帯の原理で再葬をとらえたのであり、それは一応矛盾なく説明できたと考えている。しかし、人骨鑑定の見直し次第では田中説も十分成立すると考えられ、壺棺再葬墓の成立と前後する時期に、西日本型の抜歯の影響で関東、南奥地方も抜歯が複雑化していく現象は田中説に有利に働く。実のところいづれとも決めがたいというのが率直な感想であり、再葬墓の形成過程を社会組織の問題に絡めて合理的に説明しうる可能性のある数少ない仮説としての田中説の意義もまた大きいものと思われる<sup>(23)</sup>。今後、出自原理と年齢階梯の原理とが親族組織や墓制において相容れないものなのか、あるいは両者が複雑に絡み合う構造をとるのか、という視点から社会人類学や民族学の成果を借りつつさらに議論を尽くしていけばよいだろう。

以上、壺棺再葬のプロセスを復元的に考察し、複棺型壺棺再葬墓の形成の問題から再葬墓の埋葬原理を論究した。あらためて気づくことは墓域構成過程にしろ、複棺再葬墓の形成にしろ、それを解きほぐす基礎は墓坑の年代であり、土器の編年である。こうした基礎的研究が進められていることはもちろん承知しているが、筆者はいまだ全般にわたる定見をもちえていないため、墓域構成の復元に際しては深く論ずることができなかつた。したがって、本稿のその部分に関しては十分な手続きも示していないし、あくまで予察であり後日補正しなくてはならない。今後の課題であり、いずれ体系的な編年にもとづき再論することで責めをふさぎたい。

本稿は、1991年度文部省科学研究費補助金奨励研究Aによる成果の一部である。

1992年10月30日稿了

### 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、阿久津 久、飯島義雄、石井克己、石川日出志、伊藤 実、井上洋一、岩崎卓也、上野和男、大沢 哲、大島慎一、大塚昌彦、金子正之、唐澤至朗、橋内 巧、金 貞姫、甲元眞之、五ノ井忠道、小林青樹、佐藤由紀男、佐藤嘉広、佐原義春、塩田民一、柴田俊彰、白石太一郎、須藤 隆、大工原 豊、高橋圭次、田多井用章、田中 琢、利根川章彦、外山和夫、鳥羽政之、中沢道彦、仲田茂司、中村二郎、西本豊弘、林 克彦、春成秀爾、平野進一、藤尾慎一郎、古川利意、前田清彦、松浦有一郎、三宅敦気、目黒鶴吉、目黒吉明、森 幸彦、武藤達雄、山田康弘、若狭 徹、綿田弘実、渡辺修一、渡邊朋和の諸先生、諸氏、諸機関からご教示をいただいたり資料実見の便をはかっていただいた。挿図は図2と図11以外は各報告書のものを、図11は〔水野 1968〕文献を改変し使用させていただいた。写真1は〔飯島ほか 1987〕論文から、図6の写真は〔杉原ほか 1974〕論文から転載させていただいた。飯島氏、群馬県立歴史博物館、月夜野町教育委員会、明治大学考古学研究室のご配慮に感謝申し上げる次第である。

### 註

- (1) 関東地方では岩櫃山式という土器様式が設定されているが、岩櫃山鷹の巣岩陰は再葬墓遺跡である〔杉原 1967〕。墓地の土器には葬送儀礼などによって、器種のかたよりなど日常生活で使う土器群とは異なるさまざまなファクターが付加されるという。また、壺棺再葬墓は後に述べるように、土坑出土の土器に新古が混じる可能性が指摘されており、一括遺物としてとらえられるのか疑問である。したがって、岩櫃山遺跡の3つの土器群はそれぞれ時期的なまとまりが強いとはいえ、「岩櫃山式」は再葬墓出土土器編年への適用にとどめるべきで、一般集落の土器によって設定される土器編年に組み込むべきではない。
- (2) 鷹の巣岩陰からも土器棺の外から人骨が出土しているが、この土器棺は後に述べるように最終的な再葬か否か問題があるので、同列には扱えない。
- (3) 金子正之の厚意により、埼玉県熊谷市教育委員会の資料を実見。
- (4) 石川は報文で一次葬としているが、本稿でいう単葬である。一次葬は二次葬と対になる言葉であり、再葬の初葬〔春成 1988 b〕として用いるべきで、石川もその後訂正している〔石川 1987〕。
- (5) 柳田国男は、火葬はそれのみで完結した葬式ではなく、骨あげからその骨を処理し、保存する第二の手続きを伴うから、複葬制の一種だとみている〔柳田 1929〕。
- (6) 外山らは穿孔人歯骨に特別な扱いがなされて、火葬の後にその場に運ばれたと考えている。
- (7) オーストラリアのマラ族では次のような複葬の例が報告されている。死体は蒸し焼きにされ、儀礼的食人をおこなった後、丁寧に骨を取り出し、樹皮にくるんで台の上に乗せる。3～4ヶ月で骨がきれいになると地上に落とし、頭蓋骨は砕き、膊骨以外は埋葬する。膊骨は母親が2～3年保存し、最終の儀礼で骨を棺に入れ、山麓の岩穴などに隠すか、河辺の岸の木の枝に置くという〔棚瀬 1966 : P106〕。つまり、この場合の部分遺骨の保存は、Ⅲ段階の間に限られるのであり、母親が終生持っているものではないのである。これは①から⑦を経て⑧に至る過程であって、八束脛の穿孔人歯骨の経緯を考えるうえで参考になる。



- (8) 根古屋の焼人骨層は、1 a 期か 1 b 期かわからない。2 期の土器も伴うようである。
- (9) 骨にくらべて歯に火を受けた痕跡がないか少ないために、この遺構出土の骨と歯は同一の過程で持ち込まれたものではないと考えられている〔荒巻ほか 1988〕。
- (10) 焼人骨・破砕骨の意義などについては、別稿〔設楽 1993〕を併読していただければ幸いである。
- (11) 蓋をした土器棺は合口土器棺と呼ばれることが多いが、合口土器棺という用語は一般的にほぼ同じ大きさの土器の口縁を合わせたものに用いる。蓋をしたものは合蓋土器棺とされる場合もあるが、蓋はそもそも本体と口を合わせて用いるものだから、この用語は不適切である。
- (12) 鳥羽政之の厚意により、埼玉県岡部町教育委員会の資料を実見。
- (13) 再葬墓地帯におけるこの時期の遺構や遺物包含層は、再葬墓以外にほとんどないといっても過言ではない。つまり、この時期の土器編年は墓というさまざまなファクターが多様に作用を及ぼす資料を利用するのであり、短期廃絶を保証するものはほとんどないのだから、型式学的操作によって年代を論じているわけである。したがって、再葬墓土器と短期廃絶の一括土器と比較したうえでの議論ではないので、再葬墓の複数埋納土器は使用時期が別々のものの集合であったのか、それとも純粹型式学的には時間差と判断されるかもしれないが、実際には集落においては同時に用いられる時間幅が重なるものなのか、という問題が生じる。この問題の解決、つまり一括か集合かあるいは層位的なデータや確実に短時間で使用、廃絶されている一括資料とその出現頻度による検証を要するが、今後もそれが望めない現状では、より精緻な型式学的検討が必要とされる。たとえば、複棺再葬墓の土器棺に新しい型式の土器が伴うとされた場合、その資料が本当に他の共伴資料より新しいのか、あるいはそれを除いた残りの共伴資料が本当に古いのかどうか吟味する必要があるだろう。その際、土器の地域差や系統差が複雑にからんでいることも、問題解決を困難にしており、それに十分な考慮が払われているとも思えないのである。一例をあげよう。千葉県武士遺跡では 3 a 期の土器と磨消縄文による渦巻文をもつ野沢Ⅱ式土器が共伴したという〔渡辺 1988〕。野沢Ⅰ式=3 a 期、野沢Ⅱ式=3 b 期という並行関係からすれば矛盾である。しかし、3 a 期の福島県棚倉遺跡の渦文土器から五百地遺跡例を経て野沢Ⅱ式に至る過程の型式組列を吟味すれば、はたして上記の並行関係の後半の中にこの土器をおしこめてよいものか、さらなる細別と並行関係の確認が、一括か集合かという議論の前提として要求される。土器の系譜関係を考慮した型式学的研究が必要とされるゆえんである。
- (14) 再葬墓出土土器の使用状況や補修痕跡などについては観察を進めており、いずれ報告していきたい。
- (15) 1985年の愛知県考古学談話会シンポジウム「<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題」における鈴木正博の発言。
- (16) 複数土器棺の集積という行為に対しては、土器の補修痕の比率の高さ、磨耗状態、土器どうしに微妙な型式差のあるものがあるなどの状況証拠から判断しうるにすぎない。つまり、埋納以前の土器棺が実際に集積された状態で検出されたことはないのである。ただ、岩陰遺跡という一次葬の場と考えられている所から珍しくも土器棺が出土している鷹の巣岩陰の 3 群の土器は、それぞれまとまりがきわめてよく、あるいはなんらかの原因で麓の再葬墓に入れられなかった土器棺の集積を示したものかもしれない。
- (17) 春成は縄文時代の合葬の分析からそこに夫婦合葬、すなわち血縁関係にないもの同士が合葬が禁忌されていた可能性を指摘している〔春成 1980〕。そうした点と世帯の絆を墓地に持ち込むことは矛盾するものであるが、林は世帯の相対的自立性の強化〔林 1980〕とそれを抑制する矛盾の相克が縄文後晩期社会の特質であると考え、春成の技術理論〔春成 1973・80など〕、すなわち婚入者の差別化もそこに意義を見出している。
- (18) 千葉県は再葬墓が遅く普及した地域で、小規模な墓地ばかりであるとされるが、大量に再葬土器棺が発見された伝聞も漏れ聞くところである。
- (19) 8 号墓坑は 12 個体の土器からなる。このうち 11 個体は 1 a 期に属すが、1 個体だけ 1 b 期のものがある。これは蓋であり、後述のように諸々の観点からこの土器群全体が 1 b 期に埋納されたとみた。なお、15 号墓坑については前案〔設楽 1991〕を改め、第 1 群の古い部分に含ませたい。
- (20) しかし互いに重複する AU—1 号と AU—2 号の間で、混在状態ではない有意な出土状況にある剝片が接合し(図 8—6)、きわめて接近した時期に切りあうように土坑がつけられたことを示しており、切り合い関係を多大な時間差とみることに警鐘を鳴らしている。
- (21) 埋葬小群によって、環状あるいは弧状に構成される再葬墓は 3 期を境になくなるわけだが、その背景として、環状構造をとらない方形周溝墓や東北中、北部の土坑墓の影響を考えている。

(22) 西本豊弘教示。

(23) 田中は、こうした年齢階梯制度を縄文時代の年齢階梯制の延長上に置き、さらに弥生時代中期以降に導入される東国の方形周溝墓のありかたや大形住居などから、東国ではこの時代まで年齢階梯制度が存続したとする。家族や親族の血縁を単位とした階層化が進行した西日本との質的な相違を指摘し、東国の弥生社会の構造の特質も見通した。田中のいうように縄文時代の大形住居が年齢集団の起居する家屋であるという見解は、異説もあるが聞くべきだろう。また、縄文晩期における抜歯や土製耳飾の発達も年齢階梯的な制度の存在を推測する手がかりになる。こうした視点で、縄文墓地や装身具を分析してみることも必要だろう。田中の仮説の背景となる縄文時代の社会組織については、まだ不明な部分が多く課題が山積している状態である。しかし、いずれにしても田中説は新たに年齢階梯制という分析視角を持ち込んだ点、弥生時代の再葬墓は縄文時代から弥生時代にいたる東国という特質のなかで、その社会構造を射程に入れて理解しなくてはならないという、今後の研究の方向性を示した点で評価されよう。

#### 参考文献

- 青木和明・中沢道彦ほか 1990『篠ノ井遺跡群』Ⅲ 長野市教育委員会。  
阿久津久 1977『大宮町小野天神前遺跡』茨城県歴史館。  
——— 1979「大宮町小野天神前遺跡の分析」『茨城県歴史館報』6 26～54頁。  
——— 1980「大宮町小野天神前遺跡の分析(2)」『茨城県歴史館報』7 1～20頁。  
荒川 弘 1988「飯塚南遺跡」『東日本の弥生墓制』393～394頁。  
荒巻 実・若狭 徹ほか 1986『沖Ⅱ遺跡』藤岡市教育委員会。  
荒巻 実・若狭 徹・宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 1988「沖Ⅱ遺跡における「再葬墓」の構造—出土骨類の分析から—」『群馬県立歴史博物館紀要』9号 59～98頁。  
飯島義雄・宮崎重雄・外山和夫 1986「八東涇洞窟遺跡出土人骨における抜歯の系譜」『群馬県立歴史博物館紀要』7号 45～74頁。  
飯島義雄・宮崎重雄・外山和夫 1987「所謂「再葬墓」の再検討に向けての予察—特に出土骨類に焦点をあてて—」『群馬県立歴史博物館紀要』8号 21～50頁。  
石井克己 1985「押手遺跡」『第20回企画展弥生文化と日高遺跡』群馬県立歴史博物館 62頁。  
石川日出志 1981「三河・尾張における弥生文化の成立—水神平式土器の成立過程について—」『駿台史学』52号 39～72頁。  
——— 1983「いわゆる再葬墓研究の現状」『1983年度駿台史学会大会研究発表要旨』8～9頁 駿台史学会。  
——— 1987「再葬墓」『弥生文化の研究』8 148～153頁 雄山閣出版。  
——— 1988「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』74号 84～110頁。  
——— 1989a「再葬墓—研究の課題—」『考古学ジャーナル』302 17～22頁。  
——— 1989b「新潟県安田町・大曲遺跡弥生時代再葬墓群の発掘調査」『北越考古学』第2号 巻頭頁。  
石川日出志ほか 1982『村尻遺跡Ⅰ』新発田市教育委員会。  
石川 均ほか 1985『戸木内遺跡』粟野町教育委員会。  
磯崎正彦 1955「信濃南佐久郡海瀬村上ノ原出土の弥生式土器に就いて」『上代文化』25輯 43～46頁。  
伊藤玄三 1960「宮城県青木の弥生式遺跡と出土土器」『東北考古学』1輯 9～23頁。  
宇野修平・佐藤嘉広 1983「弥生時代の再葬墓址—寒河江市石田A遺跡—」『西村山地域史の研究』創刊号 31～45頁。  
梅沢重昭 1986「上人見遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』513～518頁。  
梅宮 茂・大竹憲治ほか 1986『霊山根古屋遺跡の研究』霊山町教育委員会。  
大沢 哲ほか 1991『ほうろく屋敷遺跡』(『明科町の埋蔵文化財』第3集)明科町教育委員会。  
大竹憲治 1992「阿武隈山地東縁部における縄文晩期の再葬墓の墓制」『いわき地方史研究』29号 32～37頁 いわき地方史研究会。  
大塚昌彦 1986「南大塚遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』417～419頁。  
大槻 巖ほか 1986『霊山町武ノ内遺跡発掘調査報告書』霊山町教育委員会。  
大林太良 1965『葬制の起源』角川書店。

- 小田野哲憲ほか 1985『岩手県東山町熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書』（『岩手県立博物館調査研究報告書』第1冊）岩手県立博物館。
- 小野 忍 1987『山形県酒田市生石2遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査の概要一』酒田市教育委員会。
- 甲斐博幸 1992「須和田期の方形周溝墓について—千葉県君津市常代遺跡の調査成果を中心として—」『考古学雑誌』78巻1号 132～133頁。
- 書上元博 1988「東日本弥生文化黎明期の墓制に関する覚書—いわゆる再葬墓制を中心として—」『東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周溝墓—』744～749頁。
- 書上元博ほか 1985「神川村前組羽根倉遺跡の研究」『埼玉県立博物館紀要』12号。
- 片倉信光ほか 1976「弥生時代の白石市周辺」『白石市史 別巻考古資料編』63～88頁 白石市史編纂委員会。
- 金子エリカ 1968「琉球の洗骨における諸問題」『日本民族と南方文化』493～507頁 平凡社。
- 金子正之 1988「横間栗遺跡」『東日本の弥生墓制』388～391頁。
- 加納俊介 1987「用語に関する二、三の問題」『欠山式とその前後』研究・報告編 73～80頁 愛知考古学談話会。
- 亀井正道 1955「相模平沢出土の弥生式土器に就いて」『上代文化』25輯 14～22頁。
- 亀沢 磐 1958「福岡町の金田一川遺跡」『岩手県史研究』29号 58～62頁。
- 川崎純徳・鴨志田篤二 1980『小野天神前遺跡の研究』勝田文化研究会。
- 簡野 啓 1934「人骨の納められた弥生式土器に就いて」『史前学雑誌』6巻2号 64～67頁。
- 神沢昌二郎 1983「針塚遺跡」『長野県史 考古資料編 中・南信』184～189頁。
- 神沢勇一 1975「間口洞窟遺跡(3)」(『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第9号) 神奈川県立博物館。
- 北武蔵古代文化研究会編 1988『東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周溝墓—』。
- 清野謙次 1925『日本原人之研究』岡書院。
- 1949「甕に入れて葬る習俗」『古代人骨の研究に基づく日本人種論』162～165頁。
- 熊野正也 1975「南関東地方における弥生文化の研究(2)」『史館』5号 52～71頁。
- 栗原文蔵 1960「四十坂遺跡の初期弥生式土器」『上代文化』30輯 23～26頁。
- 甲野 勇 1939「容器の特徴を有する特殊土偶」『人類学雑誌』54巻12号 31～37頁。
- 小柳正子 1979「複葬に関する一考察—再葬墓の特性を中心として—」『史館』11号 39～50頁。
- 斎藤 忠 1977「日本における再葬（洗骨葬）の展開」『大正大学研究紀要』63輯 1～35頁。
- 佐藤由紀男 1985「静岡県三ヶ日町殿畑遺跡出土の土器について(下)」『古代文化』37巻1号 17～26頁。
- 佐原 眞 1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史』1 113～182頁 岩波書店。
- 志賀敏行 1986「遺構内出土土器」『霊山根古屋遺跡の研究』45～76頁 霊山根古屋遺跡調査団。
- 設楽博己 1991「最古の壺棺再葬墓—根古屋遺跡の再検討—」『国立歴史民俗博物館研究報告』36集 195～238頁。
- 1993「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』49集。
- 周東一也 1977『岩代国宮崎遺跡』金山町教育委員会。
- 周東一也・佐藤甲二 1978『第3次岩代国宮崎遺跡調査概報』金山町教育委員会。
- 杉原荘介 1967「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』3巻4号 37～56頁。
- 1968a「新潟県六野瀬遺跡の調査」『考古学集刊』4巻1号 77～91頁。
- 1968b「福島県成田における小堅穴と出土土器」『考古学集刊』4巻2号 19～28頁。
- 1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』（『明治大学文学部研究報告』第八冊）。
- 杉原荘介・大塚初重 1974『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』（『明治大学文学部研究報告』第4冊）。
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎 1969「茨城県殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』4巻3号 33～71頁。
- 鈴木正博 1982「『出流原』抄」『利根川』3 13～15頁。
- 須藤 隆 1979「東日本における弥生時代初頭の墓制について」『文化』43巻1・2号 109～144頁。
- 須藤 隆ほか 1984『福島県会津若松市墓料遺跡』会津若松市教育委員会。
- 関 義則 1983「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10号 26～71頁。
- 大工原 豊ほか 1988『注連引原Ⅱ遺跡』群馬県安中市教育委員会。
- 武末純一 1991「近年の時代区分論義—特に弥生時代の開始を中心に—」『日本における初期弥生文化の

- 成立 横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ』173～185頁。
- 田中国男 1944『縄文式弥生式接触文化の研究』。
- 田中 琢 1991『倭人争乱』(『集英社版 日本の歴史』2)。
- 棚瀬襄爾 1966『他界観念の原始形態』(『東南アジア研究双書』I) 京都大学東南アジア研究センター。
- 都出比呂志 1986「墳墓」『岩波講座日本考古学』4 217～267頁 岩波書店。
- 外山和夫 1986 a 「三笠山岩陰遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』483～485頁。
- 1986 b 「只橋川下岩陰遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』485～487頁。
- 外山和夫・宮崎重雄・飯島義雄 1989「再葬墓における穿孔人歯骨の意味」『群馬県立歴史博物館紀要』10号 1～30頁。
- 中島直幸ほか 1982『菜畑—佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査—』(「唐津市文化財調査報告書」5集) 唐津市。
- 中島 宏ほか 1984『池守・池上 一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書』埼玉県教育委員会。
- 中村五郎 1988『弥生文化の曙光』未来社。
- 中村五郎・芳賀英一 1982「弥生時代の熱塩加納」『熱塩加納村史』1巻 27～46頁。
- 中山英司ほか 1952『吉胡貝塚』(『埋蔵文化財発掘調査報告』1) 文化財保護委員会。
- 永山倉造 1977「弥生中期の甕棺から人骨を発見」『考古学ジャーナル』140 35頁。
- 西沢寿晃・小松 虔 1978「長野県佐久市月明沢遺跡発掘調査について—一人歯牙加工品の出土—」『長野県考古学会誌』31 32～37頁。
- 西ノ浜海食洞穴発掘調査団 1983『三浦市西ノ浜洞穴』。
- 馬場悠男・茂原信生・大竹憲治 1986「根古屋遺跡出土の穿孔された人骨・歯装身具について」『霊山根古屋遺跡の研究』114～120頁 霊山町教育委員会。
- 林 謙作 1977「縄文期の葬制第Ⅱ部 遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』63巻3号 1～36頁。
- 1979「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』26巻3号 1～16頁。
- 1980「東日本縄文期墓制の変遷(予察)」『人類学雑誌』88巻3号 269～284頁。
- 林 幸彦 1985「15点の銅釧が出土した上直路遺跡」『長野県埋蔵文化財ニュース』15。
- 林原利明 1985「東日本における初期弥生時代の墓制—再葬墓について—」『白山史学』21号 31～58頁。
- 春成秀爾 1973「抜歯の意義(1)—縄文時代の集団関係とその解体過程をめぐって—」『考古学研究』20巻2号 25～48頁。
- 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』40号 25～63頁。
- 1980「縄文合葬論—縄文後・晩期の出自規定—」『信濃』32巻4号 1～35頁。
- 1983「縄文墓制の諸段階」『歴史公論』94 40～51頁。
- 1985「鉤と霊—有鉤短剣の研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』7集 1～62頁。
- 1986「弥生時代」『図説発掘が語る日本史』2巻 116～156頁 新人物往来社。
- 1988 a 「葬送の世界」『原像日本』2巻 168～188頁 旺文社。
- 1988 b 「埋葬の諸問題」『伊川津遺跡』(『渥美町埋蔵文化財調査報告書』4) 395～420頁 渥美町教育委員会。
- 春成秀爾・西本豊弘・江原昭善ほか 1988『伊川津遺跡』(『渥美町埋蔵文化財調査報告書』4) 渥美町教育委員会。
- 蛭間真一ほか 1978『上敷免遺跡』深谷市教育委員会。
- 藤尾慎一郎 1988「縄文から弥生へ—水田耕作の開始か定着か—」『日本民族・文化の生成 永井昌文教授退官記念論文集1』437～452頁。
- 藤田 等 1966「埋葬」『日本の考古学』Ⅲ 300～326頁 河出書房新社。
- 古川利意 1978『会津上野遺跡調査報告』高郷村教育委員会。
- 古川利意ほか 1987『窪田遺跡』只見町教育委員会。
- 星田享二 1976「東日本弥生時代初頭の土器と墓制—再葬墓の研究—」『史館』7号 10～52頁。
- 増田逸朗 1976「三ヶ尻上古遺跡」『埼玉県土器集成』4 16～17頁 埼玉考古学会。
- 馬目順一 1984「再葬墓」『考古学調査研究ハンドブック』1 156～161頁 雄山閣。
- 三島 格 1973「鉤の呪力—巴形銅器とスিজガイ」『古代文化』35巻5号。
- 水野正好 1968「環状組石墓群の意味するもの」『信濃』20巻4号 255～263頁。

- 宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 1985「日本先史時代におけるヒトの骨及び歯の穿孔について—八束涇洞窟遺跡資料を中心に—」『群馬県立歴史博物館紀要』6号 77～108頁。
- 村越 潔ほか 1991『砂沢遺跡発掘調査報告書』弘前市教育委員会。
- 目黒吉明・柴田俊彰 1971『鳥内遺跡発掘調査概報』石川町教育委員会。
- 森田久男ほか 1986『町屋遺跡』『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県教育委員会。
- 八代町誌編纂室 1975『八代町誌』。
- 柳田国男 1929「葬制の沿革について」『人類学雑誌』44巻6号 295～318頁。
- 山口 明ほか 1986『塩崎遺跡群Ⅳ』長野市教育委員会。
- 山崎純男ほか 1979『板付遺跡調査概報 板付周辺遺跡調査報告書5』（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』49集）福岡市教育委員会。
- 山崎義雄 1959「群馬県上久保弥生式遺跡調査報告」『考古学雑誌』44巻3号 17～21頁。
- 山内清男 1932「日本遠古之文化Ⅳ 1～5」『ドルメン』1巻8・9号。
- 横須賀考古学会 1984『三浦半島の海食洞穴遺跡』。
- 吉田町教育委員会 1982「わらび沢岩陰遺跡」『吉田町史』42～51頁。
- 吉田 稔ほか 1991『小敷田遺跡』（『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』95集）埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 若狭 徹 1992 a 「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』84号 16～61頁。
- 1992 b 「弥生中期「出流原型壺」成立過程の一考察—榛名山南麓における新例資料を媒介に一」『群馬考古学手帳』3号 25～33頁。
- 和田千吉 1917「信濃国腰越発掘土偶」『考古学雑誌』8巻3号 176～177頁。
- 渡辺修一 1988「武士遺跡」『東日本の弥生墓制』207～209頁。
- 渡邊朋和ほか 1983『緒立遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会。

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

## Reburial Grave with Funeral Urn in the Yayoi Period

SHITARA Hiromi

The funeral method called "reburial" is the deliberate and repeated handling of dead bodies, and the repeated holding of funeral ceremonies. In one part of eastern Japan, reburial graves mainly using jar-shaped pottery as cinerary urns developed in early agricultural society from the end of the Final Jōmon period to the Yayoi period III (B.C.2C-A.D. 1C). A characteristic grave was a multi-coffin urn reburial grave, containing more than one pottery urn in a pit.

It has been verified that a larger amount of severely worn or repaired pottery is excavated from multi-coffin reburial graves than from ordinary settlement sites, and that several pottery urns were reburied together. In some cases, the pottery is of different styles, which makes us suppose that considerable time passed before their burial, but this is rare. Therefore, cinerary urns in multi coffin reburial graves were collectively buried after a certain period of accumulation. Although the period of accumulation was sometimes long enough to see a change in the style of pottery, in most cases, it does not seem to have been so very long. The number of bodies buried in a pit was mostly between two and four, although a few pits contained seven bodies. Men's and women's ashes were buried together, and sometimes, ashes of different generations, that is, adults' and children's ashes, were buried together.

In the early reburial graves, an arc-shaped cemetery was divided into several groups, and both new and old grave pits were found in each group. These groups seem to be similar to the small burial groups of the Jōmon period. The small burial groups of the Jōmon period are considered to be the accumulated grave group of a family, composed of a kin group with blood relationship, and a non-kin group of those who joined the family by marriage. If we presume that the multi-coffin reburial was one type of multiple burial, and that the principles of the multiple burials of the Jōmon period still survived, it may be reasonable to consider that people with some blood relationship were buried together in these early multi-coffin reburial graves which followed the cemetery structure of the Jōmon period. It is also considered that the small burial group, which was an assembly of these graves, indicated the grave group of one family, and that the whole cemetery was the graveyard of a single settlement.